

松江市文化財調査報告書 第110集

八雲村コミュニティー施設建設工事
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

恩 部 遺 跡

平成18(2006)年12月

鳥根県松江市教育委員会

八雲村コミュニティー施設建設工事
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

おん べ い せき
恩 部 遺 跡



平成18(2006)年12月

島根県松江市教育委員会

例　　言

1. 本書は、八雲村産業課の委託を受けて、八雲村教育委員会が平成13年度（2001年度）と14年度（2002年度）に実施した八雲村コミュニティーセンター建設工事に伴う恩部遺跡試掘調査の調査成果を取りまとめたものである。

なお、報告書の作成にあたっては、松江市と合併する以前の平成15年度に作成し、印刷については合併後の平成18年度に行った。従って、本文中に合併前の内容の記述があることをお断りしておく。

2. 本書で扱う遺跡の所在地及び調査面積等は次のとおりである。

〔恩部遺跡第1次試掘調査〕 平成13年度（2001年度）

島根県松江市八雲町熊野2752外（T1～T20）

範囲確認試掘調査面積 200m²

範囲確認調査費用 1,812（千円）

〔恩部遺跡第2次試掘調査〕 平成14年度（2002年度）

島根県松江市八雲町熊野6195外（T21～T38）

範囲確認試掘調査面積 183m²

範囲確認調査費用 2,085（千円）

3. 調査組織は以下のとおりである。

〔平成13年度〕 第1次試掘調査

調査主体 八雲村教育委員会 教育長 泉 和夫

調査指導者 池淵俊一（島根県教育庁文化財課）

事務局 三好 淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者 川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員 田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

作業員 安達きぬ子、安達茂治、安達ノブエ、安達要吉、安部直義、石倉久男

石原君子、石原政子、石原幸恵、岩崎敬承、岩田良夫、加田記子、小林佳子

小松原俊子、重本謙吉、高尾万里子、田角由香、藤田一美、藤田とし子

松原靖彦、三島一時、持田智江、山下征雄、山根 隆

遺物整理 善家幸子、高尾万里子

〔平成14年度〕 第2次試掘調査

調査主体 八雲村教育委員会 教育長 泉 和夫

調査指導者 伊藤徳広（島根県教育庁文化財課）

事務局 三好 淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者 川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員 田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

作業員 安部直義、石倉久男、石原君子、石原政子、片寄久雄、門脇千鶴、神庭睦子
子川育子、小松原俊子、坂本富栄、杉谷克己、高尾万里子、田角由香
寺本幸正、畠野 収、原 誠治、藤田とし子、持田智江、八葉京子、安井孝博
山下征雄、山根吉文、吉岡芳美

遺物整理 善家幸子、高尾万里子

[平成15年度] 報告書作成

調査主体 八雲村教育委員会 教育長 泉 和夫

事務局 三好 淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者 川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員 田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

遺物整理 高尾万里子

5. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略。所属は平成15年当時。）

西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、守岡正司（同）

丹羽野輝子（鹿島歴史民俗資料館）

6. 本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。

7. 本書で使用した方位は磁北を示す。

8. 本書に掲載した「第1図：位置と周辺の遺跡（1:25,000）」は『八雲村管内図』を使用した。

9. 「第1図：位置と周辺の遺跡（1:25,000）」の遺跡番号は島根県教育委員会発行の『増補改訂島根県遺跡地図 I』（出雲・隠岐編）2003年3月と対応している。

10. 土壌および遺物の色調には農林水産省農林水産技術會議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年版を参考にした。

11. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SB…掘立柱建物跡 P…ピット SK…土坑

SD…溝 T…トレンチ SX…不明遺構

12. 本遺跡出土遺物及び調査記録は松江市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と概要	2
第3章 調査の成果	4
1. 調査トレンチの概要	4
平成13年度調査分 (T1～T20)	
1. T1トレンチ	4
2. T2トレンチ	4
3. T3トレンチ	6
4. T4トレンチ	6
5. T5トレンチ	6
6. T6トレンチ	7
7. T7トレンチ	8
8. T8トレンチ	11
9. T9トレンチ	11
10. T10トレンチ	11
11. T11トレンチ	14
12. T12トレンチ	15
13. T13トレンチ	15
14. T14トレンチ	15
15. T15トレンチ	16
16. T16トレンチ	17
17. T17トレンチ	17
18. T18トレンチ	19
19. T19トレンチ	19
20. T20トレンチ	19
2. 調査トレンチ外出上遺物	26
2. 調査トレンチの概要	4
平成14年度調査分 (T21～T38)	
21. T21トレンチ	20
22. T22トレンチ	20
23. T23トレンチ	20
24. T24トレンチ	20
25. T25トレンチ	20
26. T26トレンチ	22
27. T27トレンチ	22
28. T28トレンチ	22
29. T29トレンチ	22
30. T30トレンチ	23
31. T31トレンチ	24
32. T32トレンチ	25
33. T33トレンチ	25
34. T34トレンチ	25
35. T35トレンチ	25
36. T36トレンチ	26
37. T37トレンチ	26
38. T38トレンチ	26
3. まとめ	28

第1章 調査に至る経緯と経過

アグリヘルスパーク整備構想は、第4次八雲村総合振興計画の中で重点プロジェクトとして位置付けられている。この構想は、農林業や観光などの産業融合と村民の健康づくりや自然環境に親しむ交流の場づくりを目的とし、農・環境・健康・文化など多様な機能を備えた交流拠点施設、農村体験交流施設の整備を行うものである。このうちアグリゾーンについては熊野地区の恩部山周辺で整備されることとなり、ヘルスゾーンは2kmほど離れた小高い丘陵地に整備される予定である。

アグリゾーン整備計画は、滞在型市民農園を核に田園空間整備事業による農業学校の建設を行うものである。このうち滞在型市民農園はクラスタ型の貸し農園（50m²×10区画）を3.5クラスタ整備し、遠方からの利用者のために宿泊施設を設置するものである。また、田園空間整備事業によるコア施設（コミュニティ施設）は、総合案内所の機能と研修等が行われる機能をもたせ、貸し農園と併設する実習農場の研修者や農業未経験者を対象とした農業学校の機能をもたせている。

この事業に先立ち、平成10年8月に八雲村産業課より工事予定地における埋蔵文化財有無についての照会があった。開発予定地は意宇川上流域左岸の低丘陵であり、ここには恩部遺跡が存在した。当初の開発計画が丘陵をカットして12,000m²の平場を造成する内容であったため、そのすべてが調査の対象となり、調査費用も膨大なものになる旨を回答した。これにより事業計画の見直しがなされ、貸し農園、コア施設、実習農場等については遺跡外の水田に場所が移され、計画変更が困難な滞在施設と連絡道路の4500m²については丘陵を削削して造成することとなった。

平成13年度は、ひとまず遺跡の範囲と性格を把握するための試掘調査を実施している。丘陵平坦部及び斜面に2×5mトレンチ18本と水田中に同規模のトレンチ2本を設定し、平成13年12月7日より作業に取りかかった。随時、遺構の精査・写真撮影を行い、12月29日に全ての調査を終了した。調査の結果、丘陵平坦部の2000m²に亘り遺跡の存在することが確認されたので、1月10日に調査結果の報告と本発掘調査費用の見積りを提出して遺跡保護の協議を行った。この結果、丘陵での計画は一日白紙に戻されることとなった。

この後、幾度となく協議を重ね、平成14年6月19日に試掘調査により遺跡と判明した場所を外した開発計画案が提出された。新たな開発予定地は昭和41年～42年に牛のエサを栽培する採草地として既に開発が行われた場所である。当時を知る人の話を聞くと、樹木を伐採したあとにブルドーザーが歩き回り、山頂部は大きく削られ山の形がすっかり変わってしまったということである。既に開発が行われている場所ではあるが、当時の造成時に多数の遺物が採取されたという記録が残っていることから、前年と同様に試掘調査を実施することとした。丘陵頂部及び斜面に2×5mトレンチ18本を設定し、平成14年9月18日から10月23日の間に調査を実施した。調査の結果、山頂部は地山まで削られており土砂の堆積は殆ど認められなかった。遺構としては上部が削られた落とし穴と時期不明の焼土坑を検出するにとどまった。これらはいずれも面的な広がりは確認できなかつた。また、丘陵斜面のトレンチからは厚く堆積した造成土を確認した。造成土を取り除いた旧表土面の保存状態は良く、古墳時代の土坑や時期不明のピットを検出したトレンチもあった。これら本発掘調査が必要なトレンチ周辺については計画を変更して遺跡を保護していただき、試掘調査によって現地での調査を終了した。

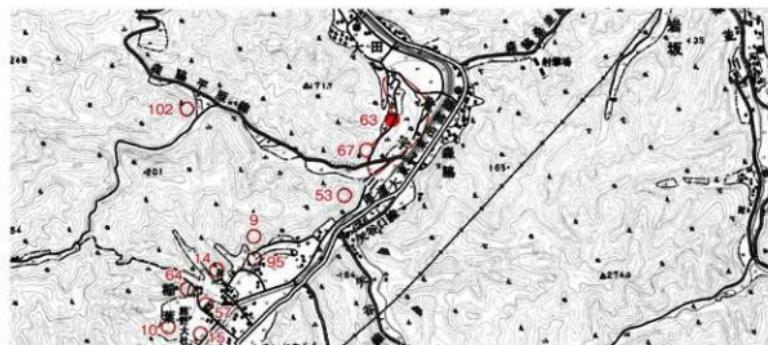
第2章 遺跡の位置と概要

八雲村は松江市の南郊、北緯35度、東経133度に位置し、北と西は松江市、南西部は大原郡大東町、南東部は能義郡広瀬町、北東部は八束郡東出雲町に囲まれている。村の規模は東西8km・南北10km・面積約55.41km²で、総面積の80%以上が山林で占められている。村の中央を意宇川が北流して中海に注いでおり、これに流れ込む数本の小河川が合流する村の北側（意宇川の中流域）に平野が展開している。遺跡はこの川と平野を取り囲む地域に多くみられ、下流域に向かうほど密集する。また、これまでの調査では古墳時代のものが顕著である。

今回調査を行った恩部遺跡は意宇川中流域左岸の低丘陵に位置している。この遺跡は昭和41・42年の採草地開発時に遺物が出土したことにより一般に知られるようになった。この時の遺物が毎日新聞に紹介されたこともあり、村内の中では知名度の高い遺跡の1つに挙げられる。昭和47年の『八雲村遺跡分布調査記録』によると多数の黒曜石の細片が採取されたという記録が残っており、昭和52年度に村内の主要遺跡についてその概要をまとめた『八雲村の遺跡』には、「須恵片、土師片、そして黒曜石のチップの表面採取ができた」と書かれている。

さて、この遺跡の立地する丘陵は恩部山と呼ばれており、数多くの伝承が残る山としても有名である。地元の古老人の話によると、尼子・毛利時代にはここに寺があったと伝えられており、遺跡の東側には「大門」という小字名をもつ畠がある。この寺に付随する門があったと伝えられているが『雲陽誌』（1717年）や『熊野村切図』（明治22年）、『寺院明細帳』に寺名の記載はなく、伝承のみが残っている。また、「恩部」はもともと「御火」が流ったものであり、熊野大社の祭祀に関連した施設があったという伝承もある。

以下、今回の恩部遺跡の調査報告にあたり、過去の分布調査で出土した恩部遺跡出土遺物と隣接地にある恩部山横穴墓群から出土した遺物を紹介しておく。



第1図 位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

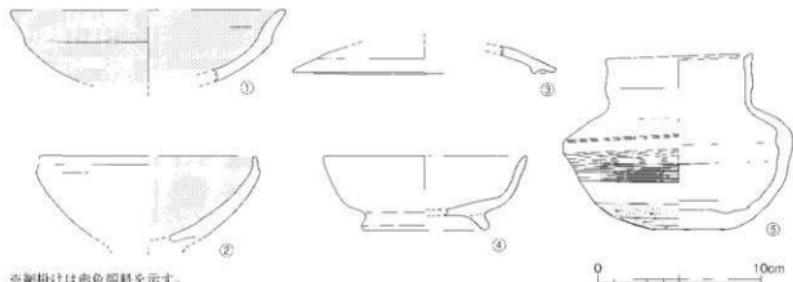
- | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|------------|----------|
| 9. 稲葉遺跡 | 10. 宮内横穴墓群 | 11. 佐尼子政久墓 | 12. 恩部遺跡 | 13. 熊野遺跡 |
| 53. 鷹形山城跡 | 57. 熊野神社北遺跡 | 63. 恩部遺跡 | 64. 田寄横穴墓群 | |
| 67. 恩部山横穴墓群 | 95. 稲葉絆塚 | 102. 鳥居タカラ跡 | | |

松江市教育委員会が保管している恩部遺跡分布調査による出土遺物の内訳は、玉器10点、黒曜石76点、土師器46点、須恵器31点、土師質土器4点、陶器2点である。この内、実測可能な土師器2点と須恵器3点を掲載した。また、恩部山横穴墓群からは須恵器3点の出土が確認されているが、⑧については実物がなく、分布調査時に作成された実測図を添付して使用した。

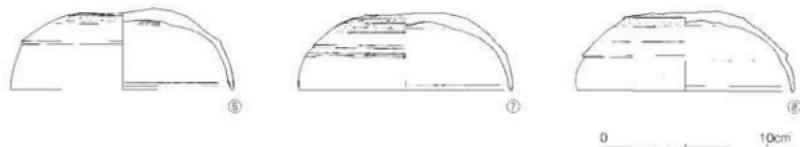
第2図①・②は土師器の高環受部の破片である。①は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反するため口縁外面に棱線をもつ。内外面には赤色顔料が塗布されている。口径は16.9cmを測る。②は体部が斜め上方に向け立ち上がり口縁部に括れをもつ。①に比べて受部がやや深いものである。外面は風化のため判然としないが、内面の一部には赤色顔料が観察できる。口径は13.0cmを測る。第2図③は須恵器の坏蓋である。口縁端部内面に返りをもち、調整は内外面回転ナデが施されている。法量は口径13.4cm、最大径16.2cmを測る。第2図④は底部に「ハ」の字状の高台がつく須恵器の坏身である。体部が丸みをもしながら曲線的に立ち上がり、口縁部は斜め上方に向け真っ直ぐに伸びる。底部の切り離しは欠損のため不明である。法量は口径12.4cm、底径7.8cm、器高4.6cmを測る。第2図⑤は須恵器の直口壺である。肩部が良く張り出し、口縁はやや内傾気味に立ち上がり端部に段を有する。調整は底部外表面が回転ヘラケズリ、体部の中程にはカキメが施されている。口径8.8cm、器高10.7cmを測る。

第3図⑥～⑧は隣接地の恩部山横穴墓群から出土した須恵器坏蓋である。肩部は沈線とナデを中心として突帯や稜が表現されており、口縁端部内面には形成が加えられ緩い段状に仕上げられている。調整は大井部外表面に比較的丁寧な回転ヘラケズリが施されている。時期は大谷編年の出雲3期に相当する。法量は⑥が口径13.6cm、器高5.0cm、⑦が口径13.0cm、器高4.7cm、⑧が口径13.4cm、器高5.0cmを測る。

これらの遺物は今回調査を実施した平成14年度調査区とその西側から出土した遺物である。



第2図 恩部遺跡分布調査出土遺物実測図 (S=1/3)



第3図 恩部山横穴墓群出土遺物実測図 (S=1/3)

第3章 調査の成果

今回実施した恩部遺跡の調査は、本調査に備えた範囲確認のためのものであった。本調査にあたっては遺跡保護を第一に考え、事業計画を変更していただくことで遺跡を現状保存することが出来た。試掘調査は事業計画の変更もあり2次にわたり実施しているが、同一遺跡内の同一事業であることからここでは一括して取り扱う。試掘トレンチの内訳は平成13年度の第1次調査がT1～T20、平成14年度の第2次調査がT21～T38である。

平成13年度調査区からは土坑6個(SK01～06)、溝3本(SD01～03)、加工段1段(第1加工段)、ピット56個(P01～56)が検出されている。特に、尾根上の丘陵平坦部からは多数のピット群が検出され、根石を伴うものや錢貨や中国産貿易陶磁器を含むものも確認された。ピット以外の遺構埋土や覆土からも多数の中世陶磁器が出土しており、この調査地周辺には中世に繁栄した建物群が存在するものと考えられる。

平成14年度調査区は昭和41年～42年に一度造成を受けた場所である。地山まで削られた丘陵上からは土坑2個(SK08・09)を検出するにとどまったが、谷筋に面した緩斜面からは完形の須恵器壺身を伴う土坑1個(SK07)とピット2個(P57・58)が検出された。覆土からは黒曜石や土師器、須恵器などが出土しており、遺跡は更に開発予定地外の北西側へ広がっているものと考えられる。平成13年度調査区から多数出土した中世の陶磁器は出土しておらず、違う性格の遺跡として捉えるべきかもしれない。以下、試掘トレンチ毎にその概略を記す。

1. 調査トレンチの概要(第4図～第36図)

1. T1トレンチ

八雲町熊野3227の東向き斜面に設定したトレンチであり、標高62.00～65.00mを測る場所に位置する。地表面より75～85cm掘削したところで軟質の小礫を多く含んだ黄褐色の地山を確認した。遺構は検出しておらず、遺物は腐葉土層に近い場所から須恵器、土師器、中国青花など9点が出している。

T1トレンチ出土遺物(第4図)

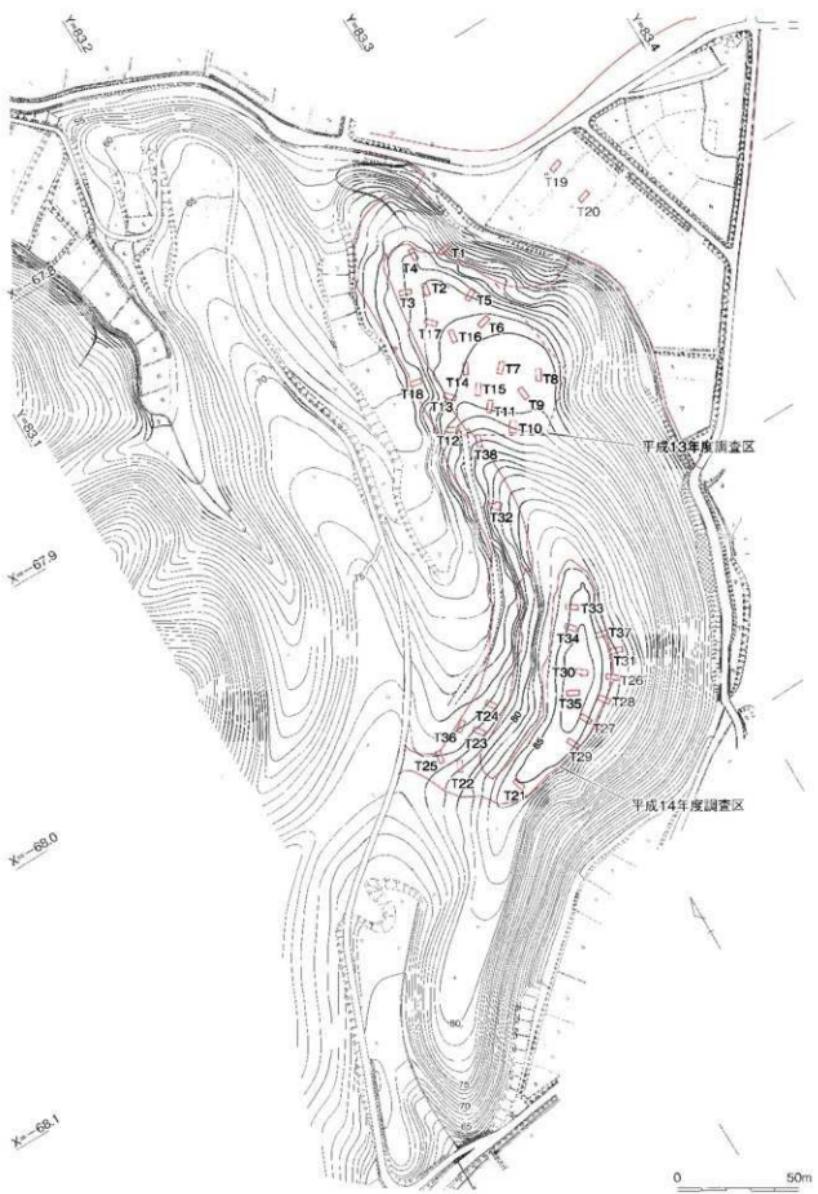
1は中国青花碗である。内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、端部は丸くおさめられている。内外面の口縁部付近に圓線が巡り、体部外面にも文様が描かれているが小片のため詳細は不明である。また、口径も復元できなかった。

2. T2トレンチ

八雲町熊野2822、2821の北向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高66.00～68.00mを測る場所に位置する。地表面より20～34cm掘削したところで赤褐色粘土の地山を確認した。近年の畑地開墾により地山まで造成が及び、畑と畑の境界は段状に削られている。遺物は耕作土層から土師質壺身、国産陶磁器、中国青磁、黒曜石、鉄片など8点が出土しているが、いずれも細片のため図化できるものではなかった。遺構は検出されなかった。



第4図 T1トレンチ出土遺物
実測図(S=1/3)



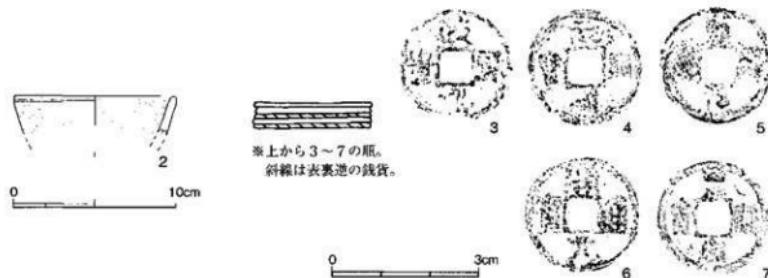
第5図 トレンチ配置図 (1:2,000)

3. T3 トレンチ

八雲町熊野2824、2820の北西向き斜面に設定したトレンチであり、標高66.00～68.00mを測る場所に位置する。地表面より40～49cm掘削したところで、軟らかい明黄褐色上の地山を確認した。周辺は地山を削って段々畝が形成されており、南→北方向に向かって加工段が続く。遺物は、加工段下の畝からは出土しておらず、加工段上に広がる丘陵平坦部の耕作土層から土師質土器、中国青磁・白磁、鉄器、銭貨など14点が出土している。遺構としては加工段下の畝地部分から円形の土坑1個と不整形の窪みを確認したが、埋土から近年の耕作に関係したものと考えられるため、今回は掲載していない。

T3 トレンチ出土遺物（第6図）

2は中国青磁碗である。体部より斜上方に向かって立ち上がり口縁に至る。端部は丸くおさめられており、外側に沈線状の文様が巡る。灰白色の素地に灰オリーブ色のいわゆる青磁釉が施されている。口径10.0cmを測る。3～7は銭貨であり、5枚が鏽のため固着した状態で出土した。銭文は3が「政和通寶」、4が「元祐通寶」、5が「開元通寶」、6が「開元通寶」、7が「皇宋通寶」である。



第6図 T3 トレンチ出土遺物実測図（青磁1/3・銭貨拓影1/1）

4. T4 トレンチ

八雲町熊野2824の尾根上平坦面に設定したトレンチであり、標高67.00～69.00mを測る場所に位置する。地表面より20～37cm掘削したところで、赤褐色粘土の地山を確認した。近年の畝地開墾により地山まで造成が及び、地山面はほぼ水平となっている。遺構は検出しており、遺物は耕作土層から須恵器、土師質土器、中国白磁など6点が出土している。

T4 トレンチ出土遺物（第7図）

8は中国白磁の皿である。基底を笠するものであり、森田E群に含まれる。時期は16世紀代と考えられる。底部外面と内面見込み部分は無釉である。底径は3.1cmを測る。

5. T5 トレンチ

八雲町熊野2776-1の標高67.00～69.00mを測る位置に設定したトレンチである。この周辺は地山を削って段々畝が形成されていた。地表面より32～51cm掘削したところで軟らかい明黄褐色上の地山を確認した。遺構は検出しており、遺物は耕作土層から中国青磁、黒曜石など4点が出土している。



第7図 T4 トレンチ出土遺物
実測図 (S=1/3)

T5トレンチ出土遺物（第8図）

9は中国青磁皿である。口縁部は逆「ハ」の字状に大きく開き、端部は平坦に仕上げられている。内面には文様が施されているが、小片のため詳細は不明である。法量は口径12.4cmを測る。



第8図 T5トレンチ出土遺物
実測図 (S=1/3)

6. T6トレンチ（第9図）

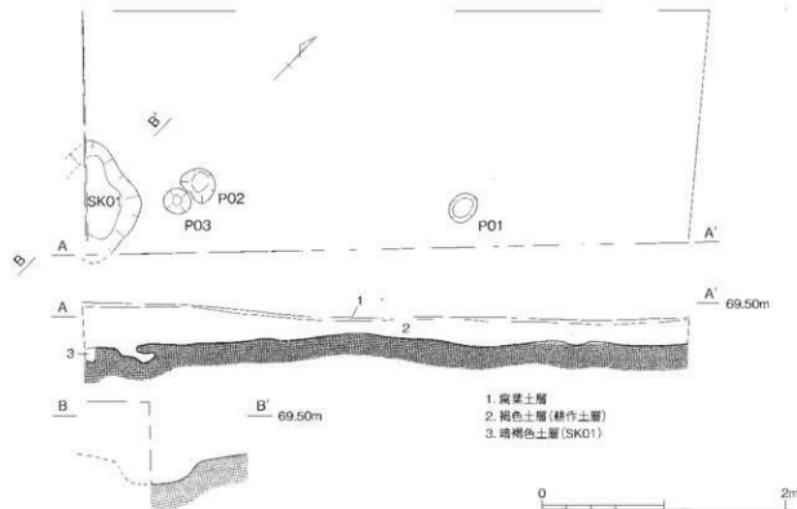
八雲町熊野2829の南東向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高69.00~70.00mを測る場所に位置する。地表面より12~38cmの深さで明赤褐色粘土の地山を確認した。遺構はピット状の落ち込み3個（P01~03）と土坑1個（SK01）を検出したが、前者は木の根の可能性が高い。遺物は耕作土層から須恵器、上部質土器、中国青花、美濃天目など12点が出土している。

SK01（第9図）

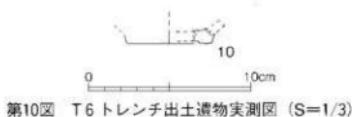
T6トレンチから検出された性格不明の土坑である。大部分が調査区外となるため一部しか調査を行っていないが、平面は推定で隅丸方形と考えられる。規模は図上で復元すると長軸80cm、短軸70cm程度のものであり、現状での深さは最大で24.1cmを測る。

T6トレンチ出土遺物（第10図）

10は美濃天目の碗である。削り出しの低い高台をもち、内面見込み部分には黒褐色のいわゆる「天目釉」が施されているが、底部外面は無釉である。底径5.3cmを測る。



第9図 T6トレンチ実測図 (S=1/40)



第10図 T6トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

7. T7 トレンチ（第11図）

八雲町熊野2752の尾根上平坦面に設定したトレンチであり、標高70.00～71.00mを測る場所に位置する。地表面より12～30cm掘削したところで明褐色粘土の地山を確認した。近年の畑地開墾により地山も掘削されており、一部に擾乱を受けた場所もみられる。遺構は溝2本（SD01・02）、ピット10個（P04～13）、不明遺構2個（SX01・02）を検出している。ピットのうちP04とP05は底部に扁平な河原石を使った根石をもつものである。

SD01（第11図）

T7トレンチから検出された幅33～52cm、深さ最大10.3cmを測る溝であり、ほぼ東～西方向に伸びている。埋土は灰黄褐色を呈し、炭化物を含んでいた。

SD01出土遺物（第12図） 11は中世須恵器の壺蓋類胴部の破片である。内面にはナデが施されており、外面に格子状のタタキをもつ。胎土は粗く2mm前後の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。12は中国天目碗である。斜上方に立ち上がる体部をもち、端部は若干内側に傾き肥厚している。口径は12.0cmを測る。16世紀までのもの。¹³13は鉄器である。断面方形を呈する軸部が伸びており、鉄釘かもしれない。法量は現状で長さ3.2cm、幅0.37～0.39cm、重量3.8gを測る。

SD02（第11図）

T7トレンチから検出された幅48～56cm、深さ最大10.2cmを測る溝であり、SD01と直交するようにほぼ南～北方向に伸びている。埋土はにぶい黄褐色を呈し、炭化物と焼土塊を多く含んでいた。

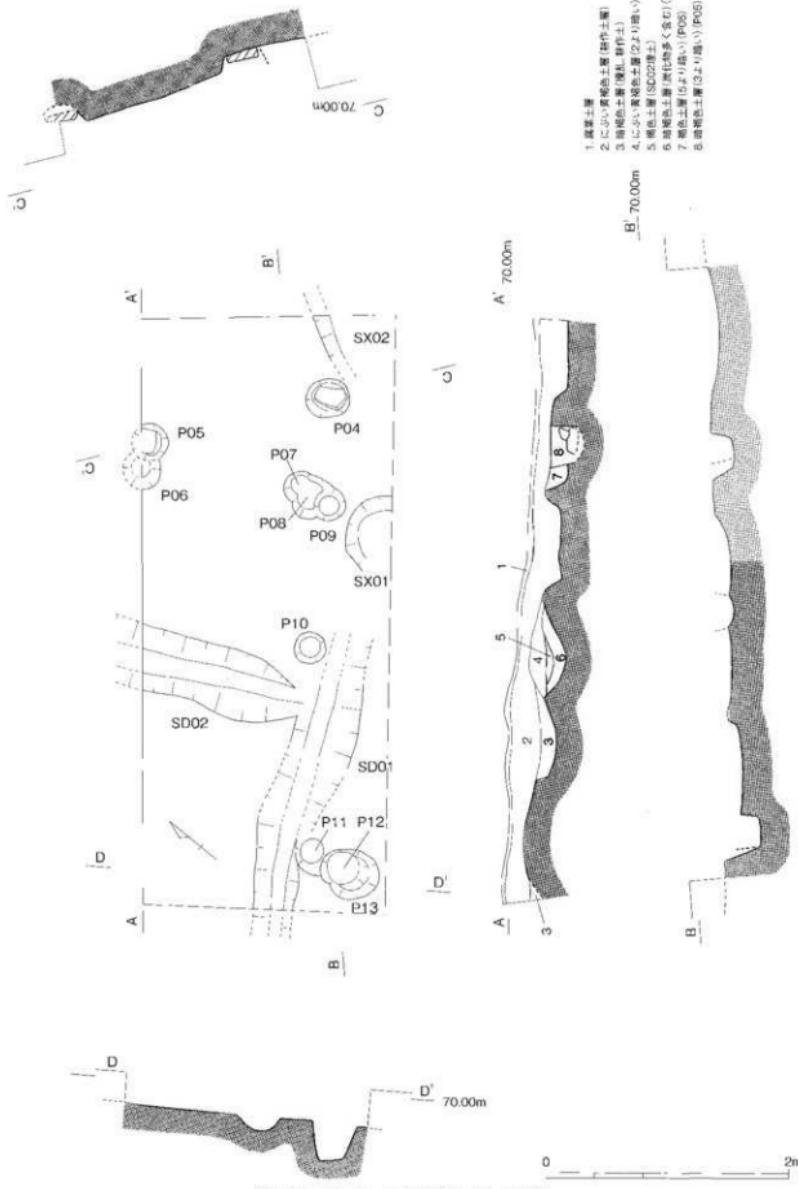
SD02出土遺物（第13図） 14～19は土師質土器である。14・15は口縁部の破片であり、逆「ハ」の字状に大きく聞く口縁をもつ。口径は14が14.0cm、15は小片のため不明である。16～19は底部の破片であり、平坦な底部より逆「ハ」の字状に大きく聞く体部をもつ。底径は16が6.0cm、17が6.0cm、18が5.8cm、19が5.2cmを測る。いずれも風化が著しく、底部の切り離しなどの調整は不明である。20は瓷器系陶器である。壺の口縁部であり、口径は43.0cmを測る。いわゆるN字状口縁を呈し、常滑焼の編年では6a型式に比定されているものである。時期は13世紀か。21は美濃の天目碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は先細りして端部に至る。内外面に黒褐色と暗褐色が混じり合ういわゆる「天目釉」が施されている。口径は12.0cmを測る。

P04・05（第11図）

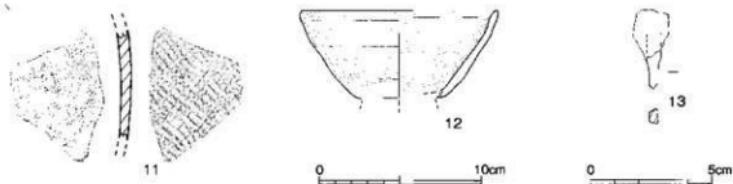
他のピットと違い底部に河原石を使用した根石をもつ。ピット間の距離は真々寸法で1.52mを測り、南東～北西方向に伸びている。規模はP04が直径36cm、深さ最大6.1cm、P05は復元直径34cm、深さ最大26.0cmを測る。P05はP06と切り合っており、新旧関係はP05（新）～P06（古）である。

T7トレンチ遺構外出土遺物（第14図）

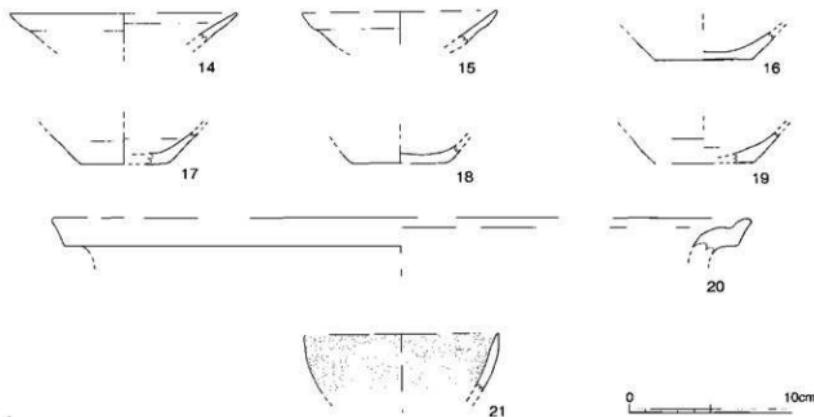
22は須恵器壺身の破片と考えられる。口縁部の立ち上がりは低く、断面は三角形を呈し非常に厚い。口径は10.9cmを測る。23は土師質土器の底部である。平坦な底部より逆「ハ」の字状に聞く体部をもつ。底径は5.8cmを測る。24・25は中国青磁碗である。24は内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部で強く外反する。上田分類D類に相当するものであり、14～15世紀頃のものと考えられる。法量は口径16.8cmを測る。25は斜め上方に立ち上がる体部をもち、口縁端部は肥厚され玉縁状を呈する。口径は18.8cmを測る。26は鉄器である。錆化が著しく判然としないが、模状のものである。法量は長さ12.0cm、最大幅4.3cm、厚さ1.6～3.0cm、重量120.9gを測る。



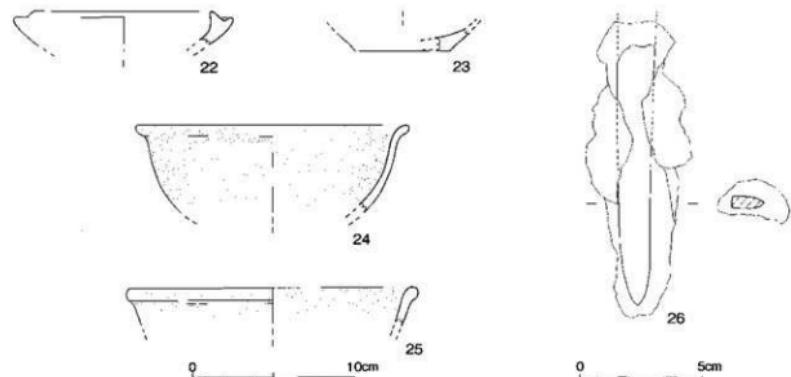
第11図 T7 トレンチ実測図 (S=1/40)



第12図 T7 トレンチSD01出土遺物実測図（土器1/3・鉄器1/2）



第13図 T7 トレンチSD02出土遺物実測図（S=1/3）



第14図 T7 トレンチ遺構外出土遺物実測図（土器1/3・鉄器1/2）

8. T8 トレンチ（第17図）

八雲町熊野2751の尾根上平坦面に設定したトレンチであり、標高70.00～71.00mを測る場所に位置する。地表面より84～144cm掘削したところで赤褐色粘土の地山を確認した。第2層は暗褐色と褐色の土層がブロック状に混じるものであり、徐々に堆積したものではなく、人為的に埋められた様相を呈する。この層からは土師器1点（第18図27）が出土している。遺構としては土坑1個（SK 02）とピット状の落ち込み8個（P14～21）を検出している。後者の中には木の根と考えられるものもある。遺物はP14から土師器1点、P15から土師器5点、覆土の第3層：暗褐色土層より須恵器、土師器、土師質土器、黒曜石など124点が出土している。

T8 トレンチ出土遺物（第18図）

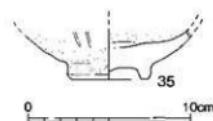
27は土師器壺である。丸底の底部であり、外面には粗いハケメが施されている。28～33は須恵器である。28は口縁端部が下垂する壺蓋である。天井部外面には回転ヘラケズリが施されている。口径16.1cmを測る。29～31は壺身と考えられる。29は断面三角形を呈する低い立ち上がりをもつ。口径12.1cmを測る。30は上げ底気味の底部から内済して立ち上がり、口縁部が内側に向て屈曲し端部を丸くおさめる。内外面に回転ナデが施されており、切り離しは糸切りによる。口径12.5cm、底径7.0cm、器高3.8cmを測る。31は体部が内済気味に立ち上がり、口縁部に括れをもつ。調整はL1縁部外側に回転ナデが施される。焼成時の歪みのため定かではないが、L1径11.4cm前後のものである。32は壺蓋類口縁部の破片である。口縁は外反して立ち上がり、端部を肥厚させている。L1径18.4cmを測る。33は半底を有する壺蓋類底部の破片である。調整は体部外側が回転ナデであり、底部の切り離しは不明である。底径9.7cmを測る。34は土師質土器である。平坦な底部より逆「ハ」の字状に聞く体部をもつ。底径5.5cmを測る。切り離しは風化のため不明である。

9. T9 トレンチ（第19図）

八雲町熊野2751の尾根上平坦面に設定したトレンチであり、標高70.00～71.00mを測る場所に位置する。地表面より19～38cm掘削したところで明褐色粘土の地山を確認した。遺構は溝1本（SD 03）、ピット10個（P22～31）を検出している。遺物はP22の埋土から中国大目碗の破片が1点、SD 03から須恵器1点と磁器1点が出土している。また、覆土からは須恵器、土師器、土師質土器、陶器、磁器など21点が出土している。

T9 トレンチ出土遺物（第15図）

35は中国青磁碗である。しっかりと削り出しの高台をもち、体部外側には細長い蓮弁を削りだしている。内面の見込み部分の勅は搔き取られており、外面の高台内部、豊付けは無釉である。上田分類B～IV類。15～16世紀頃。法量は底径5.2cmを測る。



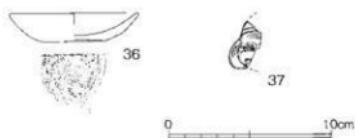
第15図 T9 トレンチ出土遺物
実測図 (S=1/3)

10. T10 トレンチ

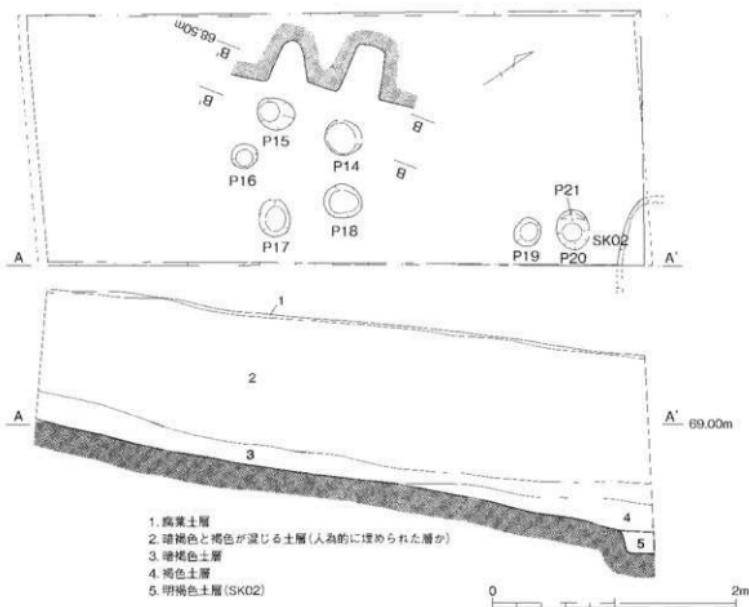
八雲町熊野2751、2748、6195-2の南東向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高71.00～73.00mを測る場所に位置する。地表面より165～210cmの深さで、明黄褐色土の地山を確認した。この周辺は昭和42年の開発時の造成土が厚く堆積していた。遺物は旧表土面に近い場所から須恵器、土師質土器、常滑系、中国青磁、伊万里、鉄鎌、貝殻など32点が出土している。

T10トレンチ出土遺物（第16図）

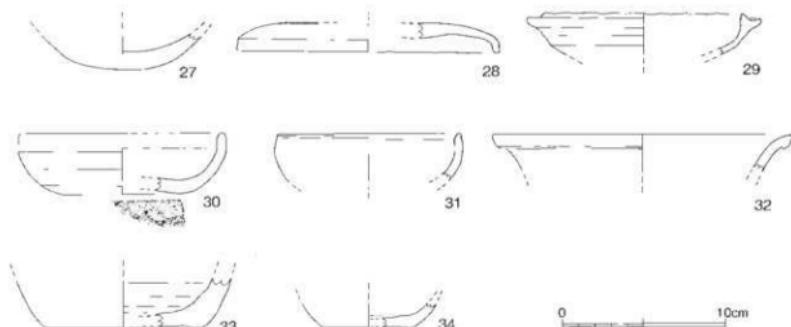
36はカワラケの皿である。上げ底気味の底部から丸みをもって立ち上がり端部を丸くおさめる。口径8.0cm、底径3.7cm、器高1.7cmを測る。37は七福神の1つと考えられる土人形である。胎土や焼成など36のカワラケと非常に良く似ている。



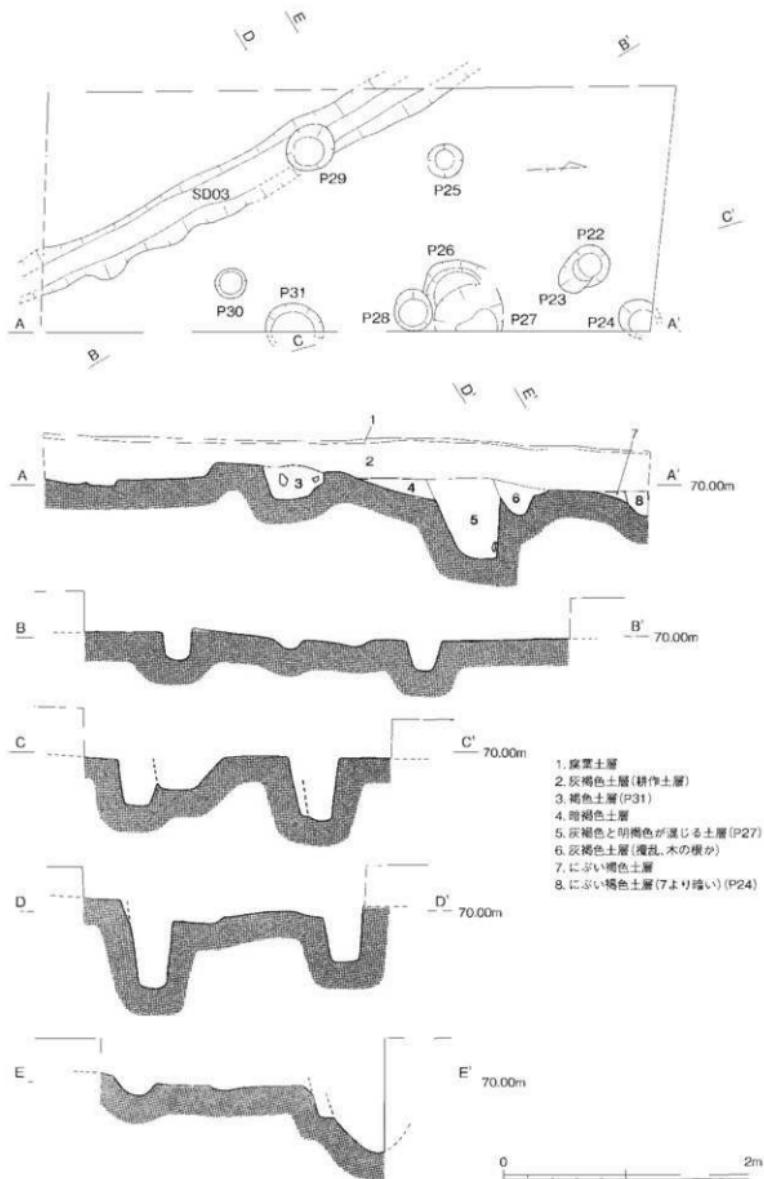
第16図 T10トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)



第17図 T8トレンチ実測図 (S=1/40)



第18図 T8トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)



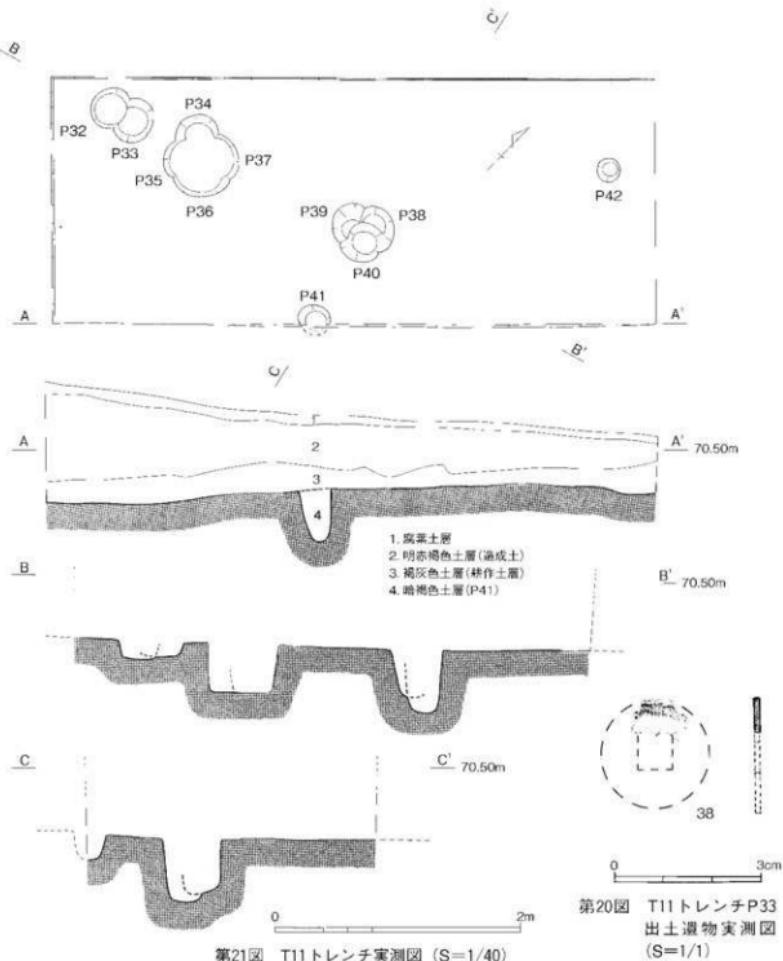
第19図 T9 トレンチ実測図 (S=1/40)

11. T11トレンチ (第21図)

八雲町熊野2751、2752-1、6197の尾根上半平坦面に設定したトレンチであり、標高70.00~72.00 mを測る場所に位置する。地表面より44~98cmの深さで軟らかい明黄褐色の地山を確認した。この周辺は開発時の造成土が厚く堆積していた。遺物はP37から土師質土器1点と焼土塊1点、P33から銭貨1枚が出土している。遺構はピット11個 (P32~42) を検出している。

T11トレンチ出土遺物 (第20図)

38はP33より出土した銭貨である。細片であり、錢文等の詳細は不明である。銭厚は最大で1.38 mmを測る。出雲市の渡橋沖遺跡SB01でみられるような「地鎮め」に関係したものと思われる。



12. T12トレンチ

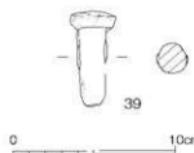
八雲町熊野6197の北西向き緩斜面に設定したものであり、標高71.00～73.00mを測る場所に位置する。この周辺は開発時の造成土が堆積しており、地表面より10～100cm掘削したところで赤褐色土の地山を確認した。遺構は検出していない。遺物はビー玉1個が出土した。

13. T13トレンチ

八雲町熊野2752-2の北西向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高68.00～71.00mを測る場所に位置する。地表面より30～53cm掘削したところで軟らかい赤褐色土の地山を確認した。遺構は検出しておらず、遺物は表土に近い位置から窯道具1点が出土した。

T13トレンチ出土遺物（第22図）

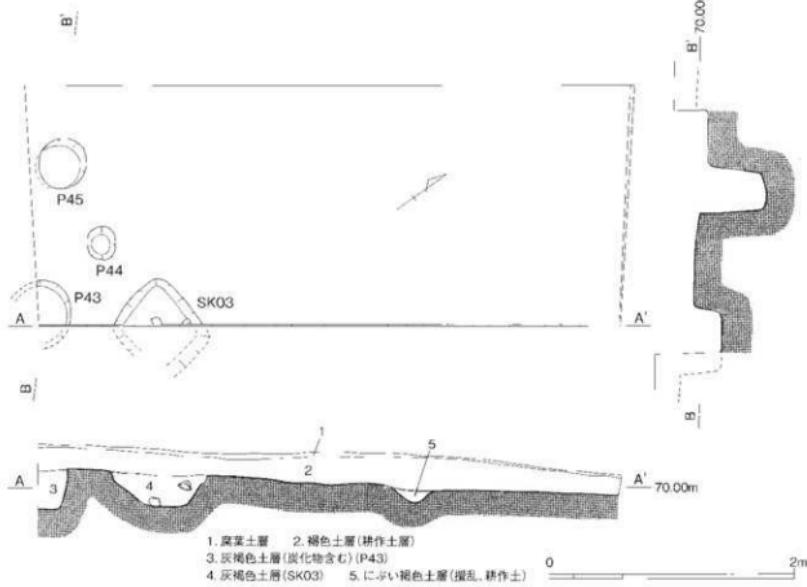
39は窯道具と考えられる。直径2.8cm、厚さ1.0cmを測る頭部の下に円柱状の軸部がつく。軸部には細長い溶着痕が残る。全長5.9cmを測る。



第22図 T13トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

14. T14トレンチ（第23図）

八雲町熊野2830の尾根上平坦面に設定したトレンチであり、標高69.00～71.00mを測る場所に位置する。地表面より18～30cm掘削したところで明褐色粘土の地山を確認した。畑地開墾により地山も削られ、一部に攪乱を受けた場所もみられる。遺構は土坑1個（SK03）、ピット3個（P43～45）を検出している。遺物は陶器、磁器、鉄器、黒曜石など5点が出土しているが細片のため図化できるものではなかった。



15. T15トレンチ（第24図）

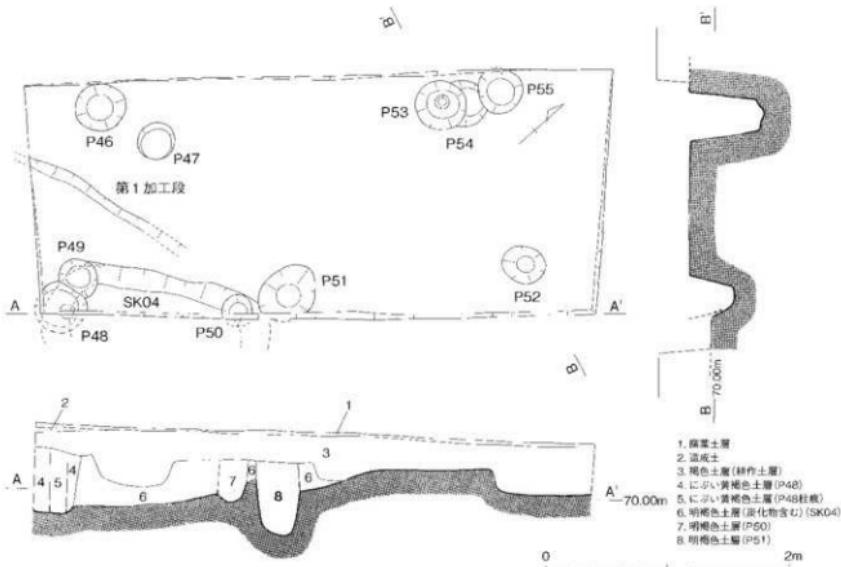
八雲町熊野2752、2752-1の尾根上平坦面に設定したトレンチであり、標高70.00～71.00mを測る場所に位置する。地表面より24～43cm掘削したところで明褐色粘土の地山を確認した。近年の畑地開墾により地山も削られ、一部に搅乱を受けた場所もみられる。遺構は土坑1個（SK04）、ピット10個（P46～55）、加工段1段（第1加工段）を検出している。土坑とピットには切り合いがみられ、新旧関係はピット（新）- 土坑（古）である。遺物はP48から鉄器1点が出土している。また、覆土からは土師質土器、中国青花、鉄器など5点が出土している。

T15トレンチP48出土遺物（第25図）

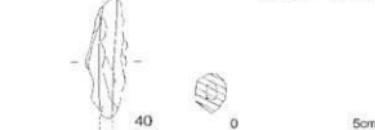
40は鉄製品である。鋸化が著しく判然としないが幅3.7mmの軸部が伸びており、鉄釘かもしれない。P48の埋土中より出土した。

T15トレンチ遺構外出土遺物（第26図）

41は土師質土器底部の破片である。平坦な底部より逆「ハ」の字状に開く体部をもつ。法量は底径4.8cmを測る。調整や切り離しは風化が著しく不明である。



第24図 T15トレンチ実測図 (S=1/40)



第25図 T15トレンチP48出土遺物実測図 (S=1/2)



第26図 T15トレンチ遺構外出土遺物実測図 (S=1/3)

16. T16トレンチ（第27図）

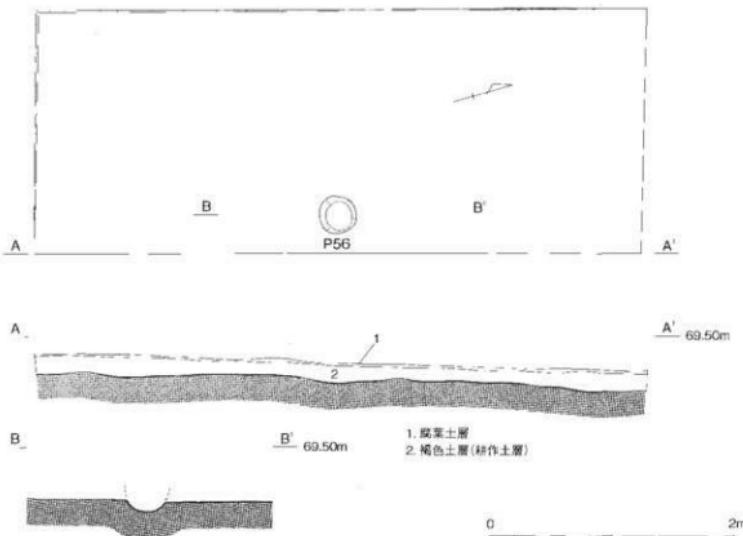
八雲町熊野2828、2829の尾根上平坦面に設定したトレンチであり、標高69.00～70.00mを測る場所に位置する。覆土は非常に浅く、地表面より11～18cm掘削したところで明褐色粘土の地山を確認した。近年の畑地開墾や耕作により地山は削られ、地山面はほぼ水平となっている。遺構はピット1個（P56）を検出している。遺物は出土していない。

17. T17トレンチ（第28図）

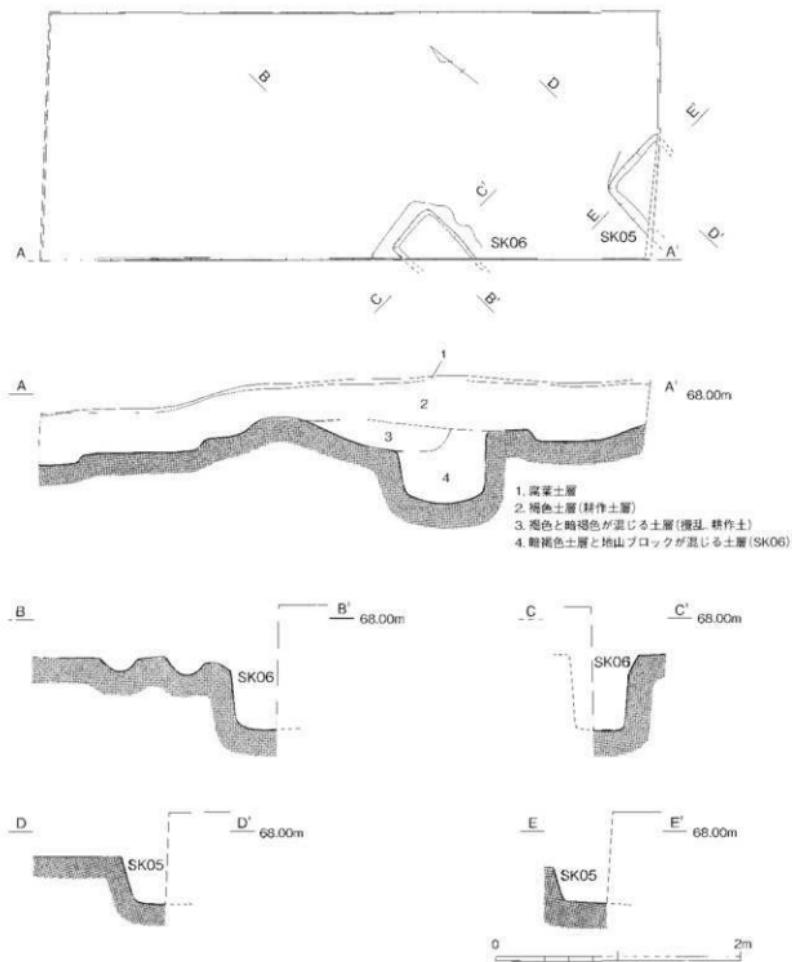
八雲町熊野2825、2826の尾根上平坦面に設定したトレンチであり、標高67.00～69.00mを測る場所に位置する。地表面より26～48cm掘削したところで軟らかい明黄褐色上の地山を確認した。畑地開墾や耕作により地山は削られ、一部に攪乱を受けた場所もみられる。また、畑と畑の境界は地山まで掘削され加工段状になっていた。遺構は土坑2個（SK05・06）を検出している。一部しか調査を行っていないが、平面は方形と考えられる。付近からは、畑と畑を区切る石垣に転用されていた五輪塔の空風輪と火輪が採集されていることから、墓壙の可能性も考えられる。これらの五輪塔は「2. 調査トレンチ外出土遺物」として記載している。遺物は須恵器、李朝粉精沙器、中国青磁香炉、土製品、鉄器など21点が出土している。

T17トレンチ出土遺物（第29図）

42は口縁部が外反する中国青花の皿か碗である。口縁部内外面に圓線が巡り、体部外面に文様が施されているようだが小片のため詳細は不明である。また、口径も復元することは出来なかった。43は鉄釘である。頭部部分の破片であり頭部は直角に折り曲げられ、軸部の断面は方形を呈している。残存長4.3cm、軸部幅4.7～5.5mmを測る。



第27図 T16トレンチ実測図 (S=1/40)



第28図 T17トレンチ実測図 ($S=1/40$)



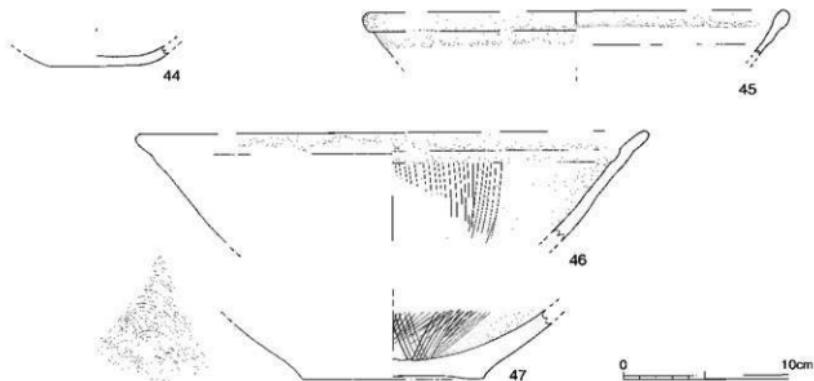
第29図 T17トレンチ出土遺物実測図 (青花1/3・鉄器1/2)

18. T18トレンチ

八雲町熊野2827-2の西向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高65.00~66.00mを測る場所に位置する。地表面より40~50cm掘削したところで赤褐色粘土の地山を確認した。畑地開墾により著しく削られ、近年の用水路や犬の糞などを検出した。遺物は須恵器、土師質土器、陶器磁器など17点が出土している。

T18トレンチ出土遺物（第30図）

44は土師質土器底部の破片である。平坦な底部より逆「ハ」の字状に開く体部をもつ。法量は底径5.5cmを測る。切り離しは風化が著しく不明である。45は産地不明陶器の鉢である。体部は斜め上方に向け大きく開き、口縁部は肥厚され玉縁状を呈する。法量は口径25.9cmを測る。46は擂鉢口縁部の破片である。体部は大きく開き気味に立ち上がり口縁部で若干外傾する。口縁部内面には幅広の沈線があり、底部から口縁部に向かって5条1組の条溝が刻まれている。法量は口径31.2cmを測る。47は擂鉢底部の破片である。上げ底気味の底部から斜め上方へ向かって大きく開く体部をもつ。底部から口縁部に向けて5条1組の条溝が刻まれている。法量は底径11.8cmを測る。胎土、色調などから46と同一個体と考えられる。これらの陶器は近代のものと考えられる。



第30図 T18トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

19. T19トレンチ

八雲町熊野2779の水田に設定したトレンチであり、標高は51.00mを測る場所に位置する。耕作土層を除去すると拳大の石を多く含む疊層を検出した。地表面より110~140cm掘り下げたが、疊が大きくなるばかりで遺物も出土しないことから掘削を終了した。遺物は耕作土層から中国青磁が1点出土したが小片のため実測できるものではなかった。

20. T20トレンチ

八雲町熊野2778-1の水田に設定したトレンチであり、標高は51.00mを測る場所に位置する。耕作土層を除去すると拳大の石を多く含む疊層を検出した。地表面より120~140cm掘り下げたが、疊が大きくなるばかりで遺物も出土しないことから掘削を終了した。遺物は耕作土層から須恵器、陶器など2点出土したが小片のため実測できるものではなかった。

21. T21トレント

八雲町熊野6195の尾根上に設定したトレントであり、標高は84.00～85.00mを測る場所に位置する。地表面より3～9cm掘り下げたところで明赤褐色砂質土の地山を確認した。この尾根上は昭和42年の開発時に掘削されているため平坦であり、腐葉土層を取り除くとすぐに地山を検出した。遺構、遺物は検出されなかった。

22. T22トレント

八雲町熊野6195の北西向き緩斜面に設定したトレントであり、標高は78.00～80.00mを測る場所に位置する。地表面より5～43cm掘り下げたところで黄褐色粘土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に盛り土が施されており、一部に造成土が堆積していた。遺構、遺物は検出されなかった。

23. T23トレント

八雲町熊野6195の北西向き緩斜面に設定したトレントであり、標高は77.00～78.00mを測る場所に位置する。地表面より9～68cm掘り下げたところで黄褐色粘土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に盛り土が施されており、一部に造成土が厚く堆積していた。遺構、遺物は検出されなかった。

24. T24トレント

八雲町熊野6195、2836-2の北西向き緩斜面に設定したトレントであり、標高は76.00～78.00mを測る場所に位置する。地表面より47～110cm掘り下げたところで黄褐色粘土の地山を確認した。この周囲は開発時の造成土が厚く堆積していた。遺構、遺物は検出されなかった。

25. T25トレント（第32図）

八雲町熊野2836-1の谷に設定したトレントであり、標高は76.00～78.00mを測る場所に位置する。地表面より66～126cm掘り下げたところで黄褐色粘土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に盛り土が施されており、造成土が厚く堆積していた。遺構は土坑1個（SK07）とピット2個（P57～58）を検出している。遺物はSK07より完形の須恵器坏身1点（第31図48）と土師器の破片1点が出土している。また、盛土下の旧耕作土層からは須恵器、土師器、黒曜石、肥前系磁器（陶胎）など62点が出土している。

SK07（第32図）

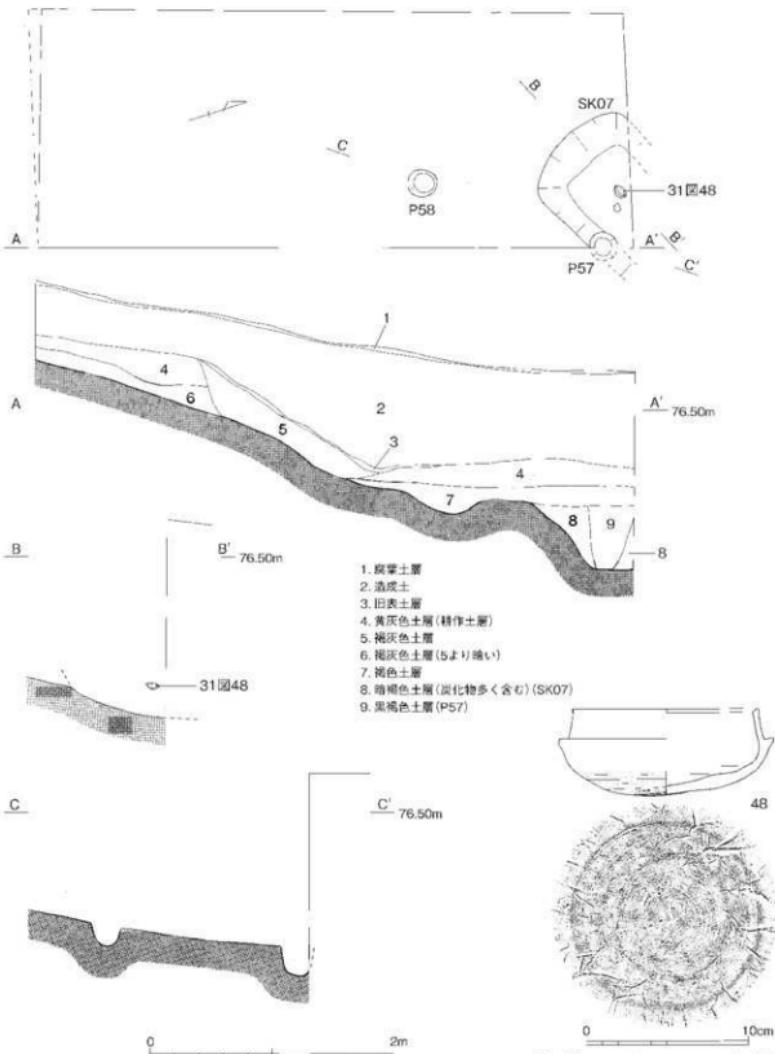
T25トレントから検出された性格不明の土坑である。一部しか検出していないが、平面形は隅丸長方形と推定される。規模は、短軸94cm、長軸104cm以上、深さは最大で52.0cmを測る。P57と切り合っており、新旧関係はSK07（古）-P57（新）である。遺物としては完形の須恵器坏身1点と土師器の破片1点が出土している。

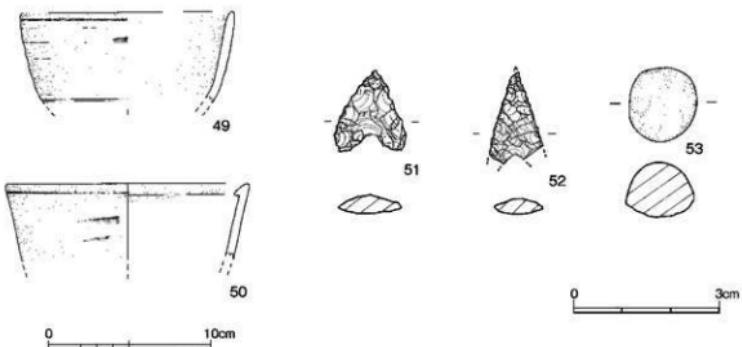
SK07出土遺物（第31図） 48は須恵器坏身である。口縁部は高く直立気味に立ち上がり、端部に平坦な面をもつ。調整は内外面回転ナデであり、底部外面には丁寧な回転ヘラケズリが施されている。法量は口径11.4cm、受部径12.2cm、最大径13.2cm、器高5.2cmを測る。焼成はやや不良である。

T25トレント遺構外出土遺物（第33図）

49は肥前系磁器の碗である。底部から丸みをもって立ち上がり、体部は斜上方に伸び口縁端部を丸くおさめる。法量は口径13.0cmを測る。50は肥前系磁器の鉢である。体部が斜上方に真っ直ぐに伸び、口縁端部を内側に折り返す。内面の口縁部以下には釉薬が施されていない。法量は口径

15.0cmを測る。51・52は黒褐色土層の石礫である。基部に抉り入りのある円基無茎式のものであり、縁辺に比較的丁寧な二次加工が施されている。法量は51が長さ1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.35cm、重量0.6gであり、52が残存長1.9cm、幅1.05cm、厚さ0.3cm、重量0.5gを測る。53は弾である。球形とならず、一部に平坦な面をもつ。法量は直径1.4cm、重量12gを測る。材質は鉛と思われる。





第33図 T25トレーニチ出土遺物実測図 (染付1/3・石器1/1・弾1/1)

26. T26トレーニチ

八雲町熊野6195の南東向き緩斜面に設定したトレーニチであり、標高は83.00～85.00mを測る場所に位置する。地表面より2～14cm掘り下げたところで明赤褐色砂質土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に掘削を受けており、地山が平らに削られていた。このため、腐葉土層を取り除くと直下が地山となっていた。遺構、遺物は検出されなかった。

27. T27トレーニチ

八雲町熊野6195の南東向き緩斜面に設定したトレーニチであり、標高は84.00～86.00mを測る場所に位置する。地表面より3～65cm掘り下げたところで明赤褐色砂質土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に造成されており、標高の高い北西側は掘削を受け地山まで削られていた。また、標高の低い南東側には掘削された造成土が厚く堆積していた。遺構、遺物は検出されていない。

28. T28トレーニチ

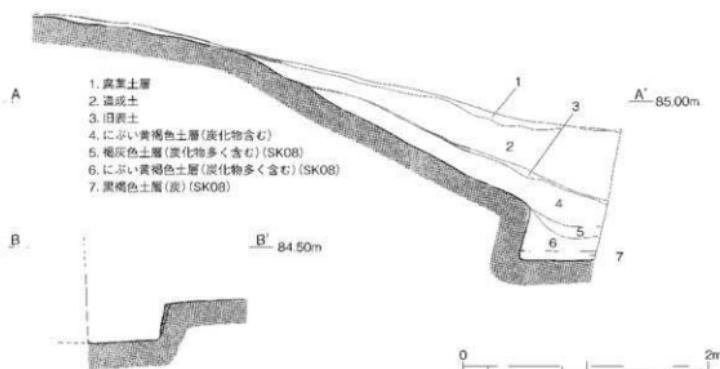
八雲町熊野6195の南東向き緩斜面に設定したトレーニチであり、標高は83.00～85.00mを測る場所に位置する。地表面より3～25cm掘り下げたところで明赤褐色砂質土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に造成されており、標高の高い北西側は地山まで掘削され、標高の低い南東側の一部には掘削された造成土が堆積していた。遺物は腐葉土層から須恵器の壺口縁部の破片が1点出土したが、小片のため実測できるものではなかった。遺構は検出されていない。

29. T29トレーニチ（第34図）

八雲町熊野6195の南東向き緩斜面に設定したトレーニチであり、標高は84.00～86.00mを測る場所に位置する。地表面より2～72cm掘り下げたところで明黄褐色砂質土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に造成されており、標高の高い北西側は地山まで掘削されており、標高の低い南東側には掘削された造成土が厚く堆積していた。遺構としてはトレーニチ南東側より焼土坑1個(SK08)を検出した。覆土中からは炭化物が多量に出土している。これらの炭化物は焼土坑に伴うものと考えられる。

SK08 (第34図)

T29トレンチから検出された焼土坑である。大部分が開発予定地の外となるため、土坑の北西部の調査しか行っていない。検出した部分から推定すると、平面形は隅丸方形になるものと思われる。平坦な底部より西側の壁は直角に、北側の壁はオーバーハング気味に立ち上がっている。壁面の全面と底部の一部が熱を受け赤変していた。特に、壁面は良く焼き締まり、一部が灰色を呈している。土坑の底部付近には炭の小片が厚く堆積していた。恐らく、小炭焼きに使用された土坑と考えられる。規模は深さ最大52.7cmを測る。



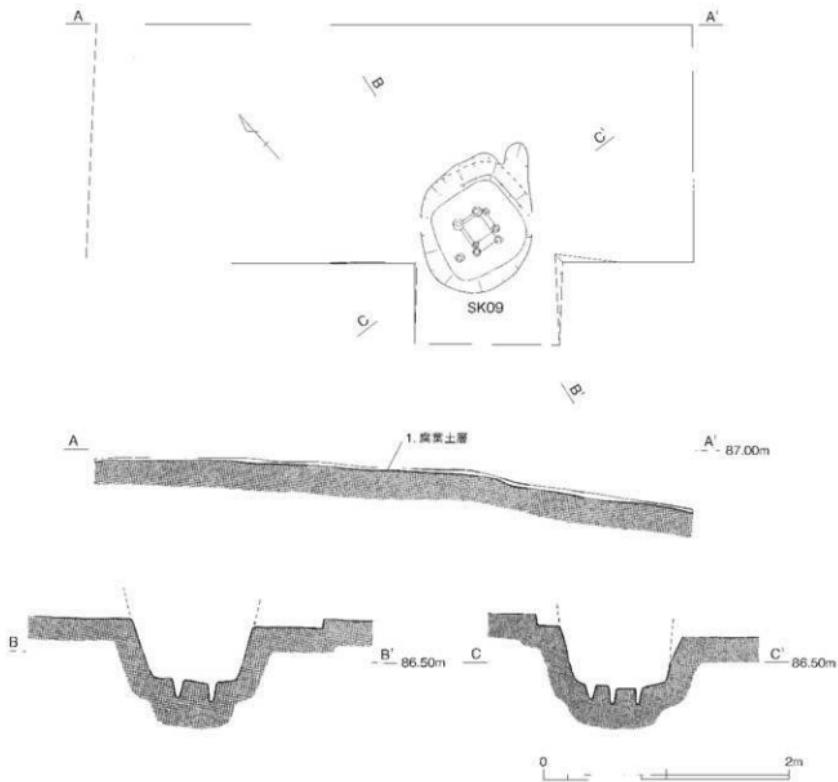
第34図 T29トレンチ実測図 (S=1/40)

30. T30トレンチ (第35図)

八雲町熊野6195の尾根上に設定したトレンチであり、標高は86.00~87.00mを測る場所に位置する。地表面より2~9cm掘り下げたところで橙色砂質土の地山を確認した。この周辺は昭和42年の開発時に掘削されており、地山が平らに削られていた。このため、腐葉土層を取り除くとすぐに地山となっていた。遺構は落とし穴1個 (SK09) を検出した。

SK09 (第35図)

SK09はT30トレンチから検出された落とし穴である。地表面から遺構検出面までが7cm程しかなく、遺構の一部は木の根により擾乱を受けていた。平面形は隅丸方形を呈し、平坦な底部から直角に近く立ち上がる壁面をもつ。規模は一辺98cm、底部から検出面までの深さは掘削を受けているため最大で52.2cmしかない。土坑底部には4個1組の小ピットが2組存在する。遺物としては埋土中より黒曜石の細片1点が出土した。



第35図 T30トレンチ実測図 (S=1/40)

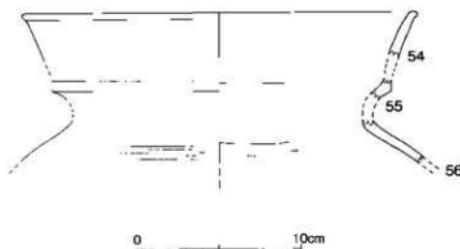
31. T31トレンチ

八雲町熊野6195の東向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高は82.00~84.00mを測る場所に位置する。地表面より2~51cm掘り下げたところで明赤褐色粘質土の地山を確認した。この周開は昭和42年の開発時に掘削されており、標高の高い西側は腐葉土層を取り除くとすぐに地山となっていた。遺構、遺物は検出されなかった。

32. T32トレンチ

八雲町熊野6198の北西向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高は76.00～78.00mを測る場所に位置する。地表面より6～89cm掘り下げたところで赤褐色砂質土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に造成を受けており、斜面上方は地山まで削られていた。また、斜面下方側はそのとき掘削された造成土が厚く堆積していた。遺物としては斜面下方側の旧表土に近い層より上師器の破片9点と黒曜石1点がまとめて出土した。このため遺物が出土した付近を長さ2.5m、幅1mほど拡張したが、新たな遺物や遺構は検出されなかった。

T32トレンチ出土遺物（第36図） 54～56は接合できなかったが、胎土・色調・焼成などから同一個体と考えられるため、図上で復元したものである。複合口縁を呈する上師器の壺であり、口縁部には平坦な面をもち、端部を若干外側に折り曲げている。調整は風化が著しく詳細は不明であるが、肩部外面に横方向のハケメ、内面の頸部以下に横方向の砂粒の動きが観察できる。法量は小片のため径の復元は不正確であるが口径24cm前後のものである。



第36図 T32トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

33. T33トレンチ

八雲町熊野6198の北西向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高は84.00～86.00mを測る場所に位置する。地表面より2～5cm掘り下げたところで明赤褐色砂質土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に掘削されており、地山が平らに削られていた。このため、腐葉土層を取り除くとすぐに地山となっていた。遺構、遺物は検出されなかった。

34. T34トレンチ

八雲町熊野6198の北西向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高は84.00～86.00mを測る場所に位置する。地表面より2～9cm掘り下げたところで明赤褐色砂質土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に掘削されており、地山が平らに削られていた。このため、腐葉土層を取り除くとすぐに地山となっていた。遺構、遺物は検出されなかった。

35. T35トレンチ

八雲町熊野6195の尾根上に設定したトレンチであり、標高は86.00～87.00mを測る場所に位置する。地表面より2～10cm掘り下げたところで橙色砂質土の地山を確認した。この周囲は昭和42年の開発時に掘削されており、地山が平らに削られていた。このため、腐葉土層を取り除くとすぐに地山となっていた。遺構、遺物は検出されなかった。

36. T36トレンチ

八雲町熊野2836、2836-2の谷に設定したトレンチであり、標高は75.00~77.00mを測る場所に位置する。地表面より178~182cm掘り下げたところで黄褐色粘土の地山を確認した。この谷間は昭和42年の開発時に盛り土が施されており、造成土が厚く堆積していた。遺物は旧耕作土層より黒曜石、須恵器、陶器の破片が7点出土したが小片のため実測できなかった。遺構は検出されなかつた。

37. T37トレンチ

八雲町熊野2746の東向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高は83.00~85.00mを測る場所に位置する。地表面より17~33cm掘り下げたところで明赤褐色粘質土の地山を確認した。遺構、遺物は検出されなかつた。

38. T38トレンチ

八雲町熊野6197、6195-2の北向き緩斜面に設定したトレンチであり、標高は73.00~75.00mを測る場所に位置する。地表面より4~10cm掘り下げたところで軟らかい赤褐色土の地山を確認した。遺構、遺物は検出されなかつた。

2. 調査トレンチ外出土遺物 (第37・38図)

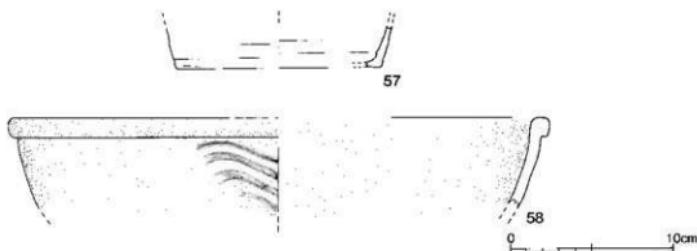
ここでは調査トレンチ以外の場所から出土した遺物を取り扱う。これらは、いずれも平成13年度に調査を実施した第1次試掘調査区から表面採取されたものである。

57は中国褐釉の瓶である。平坦な底部より斜上方に向け真っ直ぐに立ち上がる体部をもつ。法量は底径11.0cmを測る。

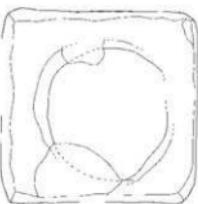
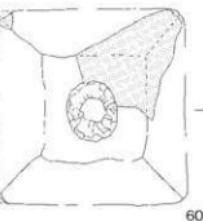
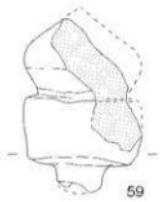
58はT18付近で表面採取された国産陶器の鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、端部は外側に折り曲げられ玉縁状を呈する。法量は口径33.0cmを測る。

59は五輪塔の空風輪である。欠損のため判然としないが空輪頂部に突起をもつタイプと思われる。T17トレンチ付近で烟と畑を区切る石垣に転用されていた。石材は凝灰岩製である。

60は五輪塔の火輪である。軸の上線と下線が中央部では平行であるが、端になると上線だけが反り返り、降棟に続く。底部には水輪の窪みにはめ込むための低い円形の枘が浮彫りされている。幅に対する高さの割合が大きなものである。59と同じようにT17トレンチ付近で烟と畑を区切る石垣として転用されていたものである。石材は凝灰岩製である。



第37図 恩部遺跡調査トレンチ外出土陶器実測図 (S=1/3)



0 20cm

第38図 恩部遺跡調査トレンチ外出土五輪塔実測図 (S=1/6)

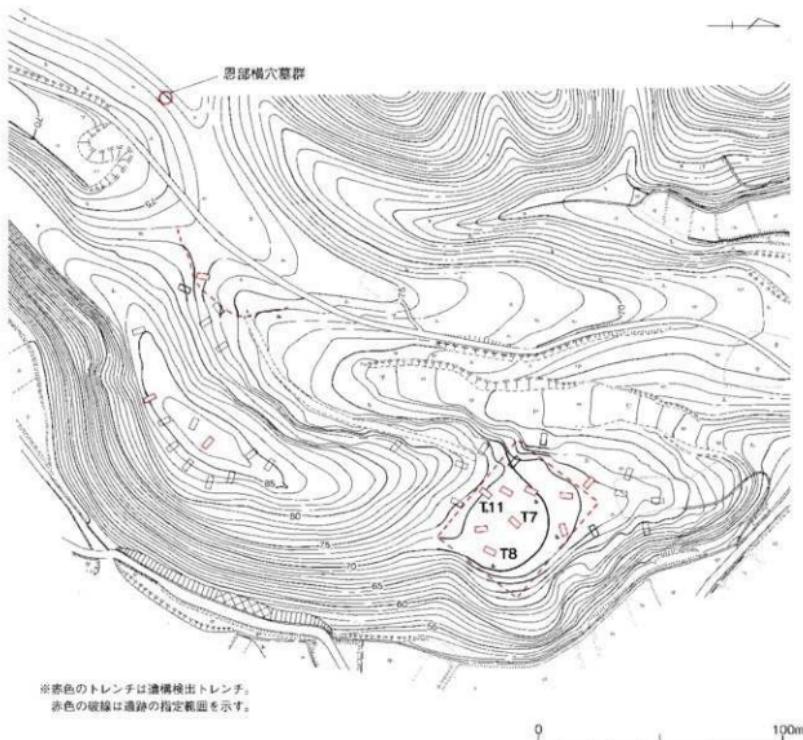
第4章 まとめ

今回の恩部遺跡の発掘は、本調査に備えた範囲確認調査であった。平成13年度に実施した第1次調査は、低丘陵及び水田に20本のトレンチ（T1～T20）を設定して行った。調査の結果、標高68～71mを測る尾根上の平坦部より上坑6個（SK01～06）、溝3本（SD01～03）、加工段1段（第1加工段）、ピット56個（P1～56）、性格不明遺構2個（SX01・02）を検出した。この平坦部はほぼ方形を呈し、その規模は長辺（南東～北西方向）50m、短辺（南西～北東方向）40m、面積約2,000m²を測る。遺構の検出状況から、ここには複数の掘立柱建物跡が存在するものと考えられる。また、切り合い関係のあるピットも数多くみられることから断続的に生活が営まれていたと思われる。方形平坦部（第39回赤色破線部分）の南東端に設定したT8トレンチからは厚く堆積した造成土が検出されている。この造成土は非常に堅く締まっており、当初はこの上面で掘削を止めていた。昭和41～42年の造成土とは土質が明らかに異なっており、掘立柱建物跡を建設するにあたり丘陵を削って方形平坦部が造成された可能性のあることを指摘しておく。遺跡の時期は、遺物を伴う遺構が少なく判然としないが、銭貨や上師質土器、中世貿易陶器を伴うピット（T9トレンチP22、T11トレンチP33、T11トレンチP37）や中世国産陶器・中世貿易陶磁器・中世須恵器・上師質土器を伴う溝（T7トレンチSD01・SD02）が検出されている。また、遺構外からも中世陶磁器や上師質土器が多数出土していることから中世を中心とした遺跡と思われる。次に遺跡の性格である。遺物には中国の天目茶碗、青磁碗、青磁香炉、青花、李朝粉精沙器、五輪塔の空風輪・火輪、銭貨（六道銭か）などが含まれており、一般集落とは違った性格の遺跡と考えるべきかもしれない。調査地である恩部山には寺があったという伝承が残っており、遺跡との関係が注目される。いずれにせよ、輸入陶磁器が多数出土しており、これらを入手できる豪族の存在が想定される。

平成14年度の第2次調査は、18本のトレンチを設定して実施した。この調査区は昭和41～42年に牛の糞を栽培する採草地として既に開発が行われた場所であり、山頂部は平らに削られていた。このため丘陵上からは落とし穴1個（T30トレンチSK09）と焼土坑1個（T29トレンチSK08）を検出するにとどまった。山頂部を削った土砂はそのまま斜面下側へ押し出され、斜面にはこの時の造成土が厚く堆積していた。特に、谷筋では176cmも盛土が施されている場所もあった。この谷筋は山頂部とは違い凹凸表面が削られていないため腐葉土層や切り株が残っていた。この谷に面した緩斜面からは、上坑1個（T25トレンチSK07）とピット2個（T27トレンチP57・P58）を検出した。土坑は出雲2期に含まれる完形の須恵器壊身を伴うものであった。この他、覆土からは黒曜石や上師器、須恵器などが出土している。地形などからみても遺跡は更に開発予定地外の西側へ広がっているものと考えられる。平成13年度調査区から多数出土した中世の陶磁器は出土しておらず、違う性格の遺跡として捉えるべきかもしれない。

今回の調査は、範囲が限定されたトレンチ調査であり、遺構的にはかなり不明瞭であったが、遺跡の範囲が特定できた点では有意義なものといえよう。また、遺物からみると村内では出土例の少ない中世陶磁器が多数発見されており、今後、この地方での陶磁器のあり方について考えるとき、貴重な資料を提供したと考えられる。

なお、一部開発計画を変更していただいたことで、試掘調査によって現地での調査を終了した。



第39図 遺構検出トレンチ配置図 (1:2,000)

[註]

- 註1 毎日新聞記事 昭和43年(1968年)8月4日
黒曜石製の石鎚半製品と輪状つまみをもつ須恵器环蓋などが紹介されている。(P-2)
- 註2 東森市良輔 「八雲村遺跡分布調査記録」 1972年3月 (P-2)
- 註3 八雲村文化財調査報告3 「八雲村の遺跡」 八雲村教育委員会 1978年3月 (P-2)
- 註4 大谷晃二 「出雲地域の須恵器の歴年と地域色」 『島根考古学会誌第11集』 1994年3月 (P-3)
- 註5 底部に切りをもつ中間土師器を便宜的に土師質土器とした。(P-4)
- 註6 森田勉 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」 『貿易陶磁研究』 NO.2 1982年 (P-6)
- 註7 西尾克己氏のご教示による。(P-8)
- 註8 中世土器研究会編 「概説中世の土器・陶磁器」 真風社 1995年 (P-8)
- 註9 上田秀夫 「14~16世紀の青磁碗の分類」 『貿易陶磁研究』 NO.2 1982年 (P-8)
- 註10 島根県教育委員会 「渡橋沖遺跡」 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3 1999年3月 (P-14)
- 註11 石鎚の実測、トレースは鹿島歴史民俗資料館の丹羽野輝子氏による。

第1表 平成13年度恩部遺跡試掘トレンチ概要一覧

トレンチ番号	トレンチ平面図	地山までの深さ(cm) 最小 最大	地山の上層	検出遺構	出土遺物の概要	順位42年 の造成土の厚さ (cm)	設定レベル (m)	トレンチ 設定地番 (字は能 て施野)	備考
T1	-	75	85 貴賀色陶片 (小粒多く 含む)	なし	表層に近い場所から須恵器・ 土器等・中國青花1点が出土。	0 62.00~ 65.00	3227	東向きの急斜面に 設定したトレンチ。	
T2	-	20	34 赤褐色粘土 層	なし	耕作土層より土師質土器1・中 國青磁1・國產陶磁器3・黒曜石 2・鉄器1点が出土。	0 66.00~ 68.00	2821· 2822	近年の畠地開墾に より上部が削平さ れている。	
T3	-	40	49 明黄色粘土 層(軟らか い)	なし	耕作土層より土師質土器1・中 國青磁1・中國白磁1・國產陶 磁器5・黒曜石5枚が出土。錢 貨は5枚が回復した状態で出 土。	0 66.00~ 68.00	2824· 2820	近年の畠地開墾に より加工段階に削ら れている。また、耕 作時に埋られた土 塊等が検出され た。	
T4	-	20	37 赤褐色粘土 層	なし	須恵器1・土師質土器2・中國白 磁1・國產陶磁器2点が出土。	0 67.00~ 69.00	2824	近年の畠地開墾に より上部が削平さ れている。	
T5	-	32	51 明黄色粘土 層(軟らか い)	なし	中國青磁1・國產陶磁器2・黒曜 石1点が出土。	0 67.00~ 69.00	2776 1	段々細い平垣面に 設定。	
T6	第9回	12	38 明赤褐色粘 土層	土・坑1個(SK 01)・ピット状の 土層	土師器1・須恵器1・土師質土器 2・中國青花2点・美濃天日1・その 他の陶器3個(P01~ 03)	0 69.00~ 70.00	2829	近年の畠地開墾に より上部が削平さ れている。	
T7	第11回	12	30 明褐色粘土 層	溝2本(SD01· 02)・ピット10個 (P04~13等の 内2個は板石をも つ)・不明焼造 (SX01~02)	中世須恵器・上部土層2・中國 天日・中國青磁・中國陶輪・空 巣器・美濃天日・圓筒 瓦窯底窓・放器等10点が出 土。直縁内からも多数出土。	0 70.00~ 71.00	2752	近年の開墾により、 著しく乱されて いた。	
T8	第17回	84	144 赤褐色粘土 層	ピット8個(P14~ 21)・土坑1個 (SK02)	覆土から土師器40・須恵器73・ 土師質土器10・黒曜石1点が出 土。この他、遺構内からも遺 物出土。	0 70.00~ 71.00	2751	尾根上平垣面に設 定したトレンチ。平 垣面は開発区域外 の東方面に広が りを見せる。	
T9	第19回	19	38 明褐色粘土 層	溝1本(SD03)・ ピット10個(P 22~31)	裏土から土師器4・須恵器3・土 師質土器2・中國青磁1・須 器系3・その他の陶器8点が出 土。P22~23から中國天日1点が 出土。	0 70.00~ 71.00	2751	尾根上平垣面に設 定。近年の開墾に より、著しく乱さ れていた。	
T10	-	165	210 明黄色粘土 層	なし	土師器3・須 器1・カワラケ1・ 中國青磁1・盞 器系1・その他の 陶器4・土器5・ 壺の貝殻3点が 出土。	63~126	2751· 2748· 6195·2	昭和42年の開発時 に埋られた造成土 を確認。	
T11	第21回	44	98 明褐色粘土 層(軟らか い)	ピット11個(P 32~42)	P37から上部土 器1点と焼土 1個、P38から鐵 器1枚が出土。	14~70	70.00~ 72.00	2751· 2732 1· 6197	昭和42年の開発時 に埋られた造成土 を確認。
T12	-	10	100 赤褐色粘土 層(軟らか い)	なし	ピート1点が出土。	0~36	71.00~ 73.00	6197	昭和42年の開発時 に埋られた造成土 を確認。
T13	-	30	53 赤褐色粘土 層(軟らか い)	なし	焼造1点が出土。	0	68.00~ 71.00	2752 Z	近年の畠地開墾に より上部が削平さ れている。
T14	第23回	18	43 明褐色粘土 層	ピット3個(P43~ 45)・土坑1個 (SK03)	黒曜石2・土器1・國產陶 磁器2点が出土。	0	69.00~ 71.00	2830	近年の開墾により、 著しく乱されて いた。
T15	第24回	24	43 明褐色粘土 層	ピット10個(P 46~55)・土坑1 個(SK04)・加 工段1段	P48から鉢1点。覆土より上部 土器2・中國青花1・國產陶 磁器1・鐵器1点が出土。	0~10	70.00~ 71.00	2752· 2752·1	近年の開墾により、 著しく乱されて いた。
T16	第27回	11	18 明褐色粘土 層	ピット1個(P56)	なし	0 69.00~ 70.00	2828· 2829	近年の畠地開墾に より上部が削平さ れている。	
T17	第28回	26	48 明黄色粘土 層(軟らか い)	土坑2個(SK05· 06)	須恵器3・中國青花1・中國褐 釉1・中國青磁香炉1・季朝粉盒沙 器1・國產陶磁器11・上製品1・ 錢貨2点が出土。	0 67.00~ 69.00	2825· 2826	近年の開墾により、 著しく乱されて いた。	
T18	-	40	50 赤褐色粘土 層	なし	上部器1・須 器3・土師質土器 2・國產陶磁器1点が 出土。	0 65.00~ 66.00	2827·2	近年の畠地開墾に より上部が削平さ れている。	
T19	-	-	に赤い黃 褐色 層	河川氾濫跡	中國青磁1点が出土。	0 51.00	2779	水田中に設定	
T20	-	-	に赤い黃 褐色 層	河川氾濫跡	須恵器1・國產陶 磁器1点が出土。	0 51.00	2778·1	水田中に設定	

第2表 平成14年度恩部遺跡試掘トレンチ概要一覧

トレンチ番号	トレンチ平面図	地山までの深さ(cm)		地山の上層 最小 最大	検出遺構	出土遺物の概要	昭和42年の 造城上 の埋蔵 (cm)		設定 レベル (m)	トレンチ 設定地番 (字は必ず て記載)	備考
		最小	最大				0	84.00~ 85.00			
T21	-	3	9	明赤褐色砂質土層	なし	なし	0	84.00~ 85.00	6195	商業上層直下が地山。重機により削ら れている。	
T22	-	5	43	黄褐色粘土層	なし	なし	0~31	78.00~ 80.00	6195	重機により地山も削 られている。	
T23	-	9	68	黄褐色粘土層	なし	なし	6~40	77.00~ 78.00	6195	昭和42年の開発時 に盛られた造城上 を確認。	
T24	-	47	110	黄褐色粘土層	なし	なし	20~80	76.00~ 78.00	6195~ 2836-2	昭和42年の開発時 に盛られた造城上 を確認。重機により 一部掘削。	
T25 第32回	66	126	黄褐色粘土層	上坑1個(SK 07)・ピット2個(P 57-58)	なし	なし	36~96	76.00~ 78.00	2836-1	包含層は耕作土層 硝。旧耕作土より多 数の遺物が出土。	
T26	-	2	14	明赤褐色砂質土層	なし	なし	0	83.00~ 85.00	6195	商業上層直下が地山。 重機により削ら れている。	
T27	-	3	65	明赤褐色砂質土層	なし	なし	0~20	84.00~ 86.00	6195	昭和42年の開発時 に盛られた造城土 を確認。那須山 が重機により削られ ている。	
T28	-	3	25	明赤褐色砂質土層	なし	鰐窓土層中より須恵器壺の破 片が1点出土。	0~20	83.00~ 85.00	6195	昭和42年の開発時 に盛られた造城上 を確認。那須山 が重機により削られ ている。	
T29 第34回	2	72	明赤褐色砂質土層	燒土坑(SK08)	なし	なし	0~52	84.00~ 86.00	6195	昭和42年の開発時 に盛られた造城上 を確認。	
T30 第35回	2	9	橙色砂質土層	落とし穴(SK09)	落とし穴内より磁器石片1点が 出土。	なし	0	86.00~ 87.00	6195	商業上層直下が地 山。重機により削ら れている。	
T31	-	2	51	明赤褐色粘土層	なし	なし	0	82.00~ 84.00	6195	一部は露土壤土層 下が地山であり、 重機により削られた ものと考えられる。	
T32	-	6	89	赤褐色砂質土層	なし	上罐器8・黒曜石1点が出土。	0~52	76.00~ 78.00	6198	昭和42年の開発時 に盛られた造城土 を確認。	
T33	-	2	5	明赤褐色砂質土層	なし	なし	0	84.00~ 86.00	6198	商業上層直下が地 山。重機により削ら れている。	
T34	-	2	9	明赤褐色砂質土層	なし	なし	0	84.00~ 86.00	6198	商業上層直下が地 山。重機により削ら れている。	
T35	-	2	10	橙色砂質土層	なし	なし	0	86.00~ 87.00	6195	商業上層直下が地 山。重機により削ら れている。	
T36	-	178	182	黄褐色粘土層	なし	須恵器1・圓窓附鉢形7・黒曜石 1点が出土。	130~174	75.00~ 77.00	2836~ 2836-2	昭和42年の開発時 に盛られた造城上 を確認。遺物は旧 耕作土層より出土。	
T37	-	17	33	明赤褐色粘土層	なし	なし	0	83.00~ 85.00	2746	擾乱を受けていな い昔のままの地形 と思われる。	
T38	-	4	10	赤褐色土層 (軟らかい)	なし	なし	0	75.00~ 75.00	6197~ 6195-2	商業上層直下が地 山。	

第3表 恩部遺跡土坑一覧表

単位(cm)

名称	検出番号	検出トレンチ	平面形	現状での規模 (上縦長軸×短軸×深さ最大)	出土遺物	埋 土	性 格	備 考
SK01	第9図	T6	推定丸 方形	長軸推定80×短軸推定70×24.1		暗褐色土	不明	
SK02	第17図	T8	不明	不明×不明×6.9		明褐色土	不明	
SK03	第23図	T14	推定方形	長軸推定72×短軸推定62×19.0		灰褐色土	不明	
SK04	第24図	T15	推定椭円 形	長軸推定200×短軸不明×14.2		明褐色土(炭化 物含む)	不明	SK01(古)～加E段(新) SK04(古)～P48～50(新)
SK05	第28図	T17	推定方形	長軸不明×短軸推定64×37.5		暗褐色土と地山 の明褐色土が混 じる。	不明	基壇か
SK06	第28図	T17	推定方形	長軸不明×46×61.3		暗褐色土と地山 の明褐色土が混 じる。	不明	基壇か
SK07	第32図	T25	推定圓丸 長方形	長軸104以上×短軸推定94× 52.0	完形の須恵器 环身×1・上部器 ×1	暗褐色土(炭化 物多く含む)	不明	SK07(古)～P57(新)
SK08	第34図	T29	推定圓丸 方形	不明×不明×52.7	灰	灰を多量に含む	小炭焼きの 上塙か	焼上坑
SK09	第35図	T30	廣丸方形	98×98×52.2	黒曜石片×1	灰褐色土	落とし穴	七坑底部に4個1組の小 ビット群が2組存在する。

第4表 恩部遺跡溝状遺構一覧表

単位(cm)

名称	検出番号	検出トレンチ	主軸方向	検出規模 (幅×現状での長さ×深さ最大)	埋 土	出 土 遺 物
SD01	第11図	T7	ほぼ西-東方向	33~52×195×10.3	灰褐色土(炭 化物含む)	土師質土器×1・中世漆器×1・中国天目×1・青 磁×1・壺器系×3・鉄器×1
SD02	第11図	T7	ほぼ南-北方向	48~56×136×10.2	に bei 黄褐色土 (炭化物と焼土 を多く含む)	土師器×1・須恵器×1・土師質土器×17・中國青 磁×1・壺器系×1・美濃天目×1・壺器系×1
SD03	第19図	T9	南東-北西方向	24~42×336×20.7	褐色土(炭化物 含む)	須恵器×1・同窓鏡器×1

第5表 恩部遺跡加工段一覧表

単位(cm)

名称	検出番号	検出トレンチ	主軸方向	検出規模 (現状での長さ×比高差最大)	埋 土	出 土 遺 物
第1 加工段	第24図	T15	ほぼ東-西方向 に伸びる	現状での長さ109×8.8	に bei 黄褐色土 層(炭化物と焼 土を多く含む)	なし

第6表 恩部遺跡ピット一覧表

単位(cm)

名称	標高番号	検出トレンチ	平面形	規模 (上縦長軸×短軸・(或)は直径)×深さ最大)	出土遺物	埋上	備考
P01	第9回	T6	楕円形	24×22×24.3		暗灰色土	木の根か
P02	第9回	T6	歪な椭円形	29×23×23.0		暗灰色土	木の根か
P03	第9回	T6	円形	直径21×25.1		暗灰色土	木の根か
P04	第11回	T7	円形	直径36×6.1			根心を持つ。
P05	第11回	T7	推定円形?	復元(推定)直徑約34×26.0		暗褐色土	P05は積石を持つ。P05 (新)-P06(古)
P06	第11回	T7	推定円形?	復元(推定)直徑約32×10.5		褐色土	
P07	第11回	T7	円形?	直徑28×18.0			P07(新)-P08(古)
P08	第11回	T7	円形?	直徑38×18.0			
P09	第11回	T7	円形	直徑28×32.3			
P10	第11回	T7	円形	直徑26×5.3			
P11	第11回	T7	推定円形	推定直徑約40×18.3			P11(古)-P12(新)-P12 (新)-P13(古)
P12	第11回	T7	円形?	復元直徑約36×17.5			!
P13	第11回	T7	円形?	直徑42×33.5			!
P14	第17回	T8	円形	直徑31×43.9	土器器×1点	暗褐色土	柱穴
P15	第17回	T8	楕円形	30×26×38.4	土器器×5点	暗褐色土	柱穴
P16	第17回	T8	円形	直徑20×34.8		暗灰色土	木の根か
P17	第17回	T8	楕円形	30×26×23.8		暗灰色土	木の根か
P18	第17回	T8	円形	直徑29×14.4		暗褐色土	木の根か
P19	第17回	T8	円形	直徑23×18.8		暗褐色土	柱穴
P20	第17回	T8	円形?	直徑27×17.5		暗褐色土	P20(新)-P21(古)
P21	第17回	T8	円形?	復元直徑約26×6.9		暗褐色土	
P22	第19回	T9	円形?	直徑32×31.2	中国瓦×1点		切り合ひ・新旧関係不明
P23	第19回	T9	円形?	直徑24×49.0			
P24	第19回	T9	推定円形	推定直徑約32×18.0		に赤い褐色土	
P25	第19回	T9	円形	直徑29×23.3			
P26	第19回	T9	円形?	復元直徑約34×27.5			切り合ひ関係にあるが新 山は不明。P27は土坑?
P27	第19回	T9	不整形	?×36×60.1		灰褐色と明褐色がブ ロック状に混じる	
P28	第19回	T9	円形	直徑34×36.5		暗褐色土	
P29	第19回	T9	円形	直徑36×60.1			

名称	埠頭 番号	横断 トレンチ	平面形	規格 (上縁長軸×選軸(或いは直徑)×深さ最大)	出土遺物	埋 上	備 考
P30	第19回	T9	円形	直徑24×26.3			
P31	第19回	T9	推定円形	推定直徑約48×19.8		褐色土	
P32	第21回	T11	円形?	直徑36×16.4		暗褐色土	P32(新)-P33(古)
P33	第21回	T11	円形?	直徑36×12.7	錢貨×1枚	暗褐色土	
P34	第21回	T11	円形?	復元直徑約35×14.6		暗褐色土	P37(新)-P34-35-36(古)
P35	第21回	T11	円形?	復元直徑約32×14.0		暗褐色土	
P36	第21回	T11	円形?	復元直徑約45×39.7		暗褐色土	
P37	第21回	T11	円形	直徑40×37.2	土器質土器・燒土塊	暗褐色土	
P38	第21回	T11	円形?	復元直徑約37×44.1		暗褐色土	P40(新)-P38-39(古)
P39	第21回	T11	円形?	復元直徑約35×38.0		暗褐色土	
P40	第21回	T11	円形?	復元直徑約30×52.8		暗褐色土	
P41	第21回	T11	推定円形	直徑26×22.0		暗褐色土	
P42	第21回	T11	円形	直徑19×11.6		暗褐色土	
P43	第23回	T14	推定円形	復元直徑約48×22.2		灰褐色土(炭化物含む)	柱穴
P44	第23回	T14	円形	直徑22×35.4		灰褐色土(炭化物含む)	柱穴
P45	第23回	T14	円形	直徑40×53.6		灰褐色土(炭化物含む)	柱穴
P46	第24回	T15	円形	直徑41×28.2			
P47	第24回	T15	円形	直徑30×61.8			
P48	第24回	T15	推定円形?	復元(推定)直徑約42×29.0	鐵器×1点	にぶい褐色土	P45(古)-P48(新), SK04(古)-P48-49(新)
P49	第24回	T15	円形?	直徑32×38.6			
P50	第24回	T15	推定円形	直徑24×29.4		暗褐色土	SK04(古)-P50(新)
P51	第24回	T15	推定楕円形	推定長軸約52×短軸12×55.9		暗褐色土	
P52	第24回	T15	楕円形	36×30×35.4			
P53	第24回	T15	円形	直徑40×60.3			P54(古)-P53-55(新)
P54	第24回	T15	円形?	直徑37×15.5			
P55	第21回	T15	円形	直徑37×38.3			
P56	第27回	T16	円形	直徑32×10.0			
P57	第32回	T25	推定円形	直徑23×21.5		黑褐色	P57(新)-SK07(古)
P58	第32回	T25	円形	直徑24×16.7		黑褐色	

第7表 恩部遺跡試掘調査出土土器観察表

単位(cm)

番号	神岡	品目	器種	出土地点 土層	胎土 焼成	色調	法量(cm)	調整・手法の特徴他		備考
								級 番な 磁器 土・白色	外:墨線と不明 紋様 内:墨線	
1 第1回	中国青花	碗	T3レンチ 耕作土層	級 番な 磁器 土・灰白色	良好	内外面に灰オリーブの青磁釉	口径:10.6	斜め上方に立ち上がる口縁 部をもつ。口縁部外側に沈線 状の文様が観察できる。	口縁部の小片	
2 第6回	中国青磁	碗	T3レンチ 耕作土層	級 番な 磁器 土・灰白色	良好	内面上半に灰黃 色の刷。その他 は無釉で灰白色	底径:3.1	内面見込み部分と底部外面 は無釉、器底を有する。	森田E群、16 世紀代	
8 第7回	中国白磁	盤	T4レンチ 耕作土層	級 番な 磁器 土・灰白色	良好	内面上半に灰黃 色の刷。その他 は無釉で灰白色	口径:12.4	逆「ハ」の字状に大きく開く口 縁。内面に文様が施されて いる。	口縁部	
9 第8回	中国青磁	盤	T5レンチ 耕作土層	級 番な 磁器 土・黄灰色	良好	内外面にオリー ブ灰の釉	底径:5.3	削り出しの低い高台をもつ。	底部	
10 第10回	美濃天日	碗	T6レンチ 耕作土層	微 粒 粒 を 含 む。青・灰白色	良好	内面:黒褐色の 釉 外面:無釉で灰 白色	底径:5.3			
11 第12回	中世 薬莢器	変更類	T7レンチ SD01	粗い。2mm前 後の砂粒を多 く含む	やや 不良	外:灰 内:暗黄青色	-	内面はナデ、外面に格子状 のタタキをもつ。	口縁部の破片	
12 第12回	中国天日	碗	T7レンチ SD01	青・灰色	良好	内外面とも黒褐 色と暗褐色が混 じり合う天目釉	口径:12.0	斜め上方に立ち上がる体部 をもち、端部は若干肥厚され ている。底部外側付近は無 釉。	16世紀までの もの	
14 第13回	土師質 土器	盤?	T7レンチ SD02	微 粒 粒 含む。 青	やや 不良	内外面橙色	口径:14.0	逆「ハ」の字状に大きく開く口 縁。先端に向かい窓々に先 期りする。底部の切り離しは 風化のため不明。	口縁部	
15 第13回	土師質 土器	盤?	T7レンチ SD02	微 粒 粒 含む。 青	やや 不良	内外面橙色	不明	逆「ハ」の字状に大きく開く口 縁をもつ。底部の切り離しは 風化のため不明。	口縁部の細片	
16 第13回	土師質 土器	不明	T7レンチ SD02	微 粒 粒 含む。 青	やや 不良	内外面橙色	底径:6.0	平坦な底部より逆「ハ」の字 状に立ち上がる。底部の切り 離しは風化のため不明。	底部片	
17 第13回	土師質 土器	不明	T7レンチ SD02	微 粒 粒 含む。 青	やや 不良	内外面橙色	底径:6.0	平坦な底部より逆「ハ」の字 状に立ち上がる。底部の切り 離しは風化のため不明。	底部片	
18 第13回	土師質 土器	不明	T7レンチ SD02	微 粒 粒 含む。 青	やや 不良	内外面橙色	底径:5.8	平坦な底部より逆「ハ」の字 状に立ち上がる。底部の切り 離しは風化のため不明。	底部片	
19 第13回	土師質 土器	不明	T7レンチ SD02	微 粒 粒 含む。 青	やや 不良	内外面橙色	底径:5.2	平坦な底部より逆「ハ」の字 状に立ち上がる。底部の切り 離しは風化のため不明。	底部片	
20 第13回	壺	甕?	T7レンチ SD02	0.5mm以 下の 砂粒を含 む。青	良好	外:にびい黄色 内:褐色	口径:43.0	いわゆる「口字状」口縁を呈 する。	常滑燒成年69 類 13世紀代か	
21 第13回	美濃天日	碗	T7レンチ SD02	青・灰白色	良好	内外面とも黒褐 色と暗褐色が混 じり合う天目釉	口径:12.0	内汚氣味に立ち上がり、口縁 部は先期りして端部に至る。	口縁部	
22 第14回	須恵器	壺身?	T7レンチ 耕作土層	0.5mm大 の 砂粒を含 む。青	良好	内外面灰色	口径:10.9 受部径:12.4 最大径:13.6	口縁部の立ち上がりは断面 三角形を呈し、非常に深い。	占墳時代後期	
23 第14回	土師質 土器	不明	T7レンチ 耕作土層	微 粒 粒 含む。 青	やや 不良	外:褐色 内:浅橙色	底径:5.8	平坦な底部より逆「ハ」の字 状に立ち上がる。底部の切り 離しは風化のため不明。	底部片	
24 第14回	中国青磁	瓶	T7レンチ 耕作土層	級 番な 磁器 土・灰白色	良好	内外面にオリー ブ灰色の青磁釉	口径:16.8	内汚氣味に立ち上がる体部 をもち、口縁部は強く外反す る。	上田分類 青磁瓶D類、 14~15世紀	

番号	種別	品目	器種	出土地点 土層	新 土	焼成	色 調	法量(cm)	調査・手法の特徴他	備 考
25	第14回	中国青磁	碗	T7トレンチ 耕作土層	微 密な 磁器 土・灰白色	良好	内外面に明緑灰 色の青磁釉	口径:18.8	体部は斜上方に立ち上がり、 腹部は肥厚され玉縁状を呈 する。	口縁部
27	第18回	土器	壺	T8トレンチ 耕作土層?	0.5 mm 大の 砂粒含む	良	内外面明赤褐色	-	丸底の底部、底部外周に粗 いハケヌメが施されている。	底部
28	第18回	須恵器	壺蓋	T8トレンチ 暗褐色土層	1 mm 大の砂 粒を含む。密	良	外:黄灰色 内:暗灰黄色	口径:16.1	口縁部がド重なる。内外 面に回転ナギ、天井部外面回 転ヘラケズリ。	口縁部
29	第18回	須恵器	壺身?	T8トレンチ 暗褐色土層	0.5 mm 大の 砂粒を含む。密	良好	内外面灰色	口径:12.1 受部径:13.4 最大径:14.4	口縁部の立ち上がりは斯古 三角形を呈し、厚い内外面 両紙ナギ。	古墳時代後期
30	第18回	須恵器	壺身	T8トレンチ 暗褐色土層	微砂粒多く含 む。密	やや不良	外:灰黄色 内:黄灰色	口径:12.5 底径:7.0 器高:3.8	上げ底気味の底部から内溝 して立ち上がり、口縁部がや や内側に向け翫曲し、面部 は丸くおさめる。内外面回転 ナギ、底部は糸切り。	
31	第18回	須恵器	壺身	T8トレンチ 暗褐色土層	微砂粒含む。密	良	外:灰黄色 内:黄灰色	口径:11.4(焼 成時の歪みの ため不明確)	体部は内溝気味に立ち上り り、口縁部にくびれをもつ。口 縁部内外面回転ナギ。	口縁部
32	第18回	須恵器	壺蓋類	T8トレンチ 暗褐色土層	0.5 mm 大の 砂粒を含む。密	良	外:灰黃褐色 内:灰い黄色	口径:18.4	口縁部は外反して立ち上り り、罐部を肥厚させる。内外 面回転ナギ。	口縁部
33	第18回	須恵器	壺蓋類	T8トレンチ 暗褐色土層	微砂粒含む。密	良	内外面灰色	底径:9.7	内外面回転ナギ。底部の切り 離しは小明。	平底の底部
34	第18回	土器質 土器	不規	T8トレンチ 暗褐色土層	微砂粒含む。 密	不良	内外面橙色	底径:5.5	平坦な底部より逆「ハ」の字 状に立ち上がる。底部の切り 離しは風化のため不明。	底部片
35	第13回	中国青磁	碗	T9トレンチ 地山直上	微密。に bei 褐色	不良	時的に火を受 けたためか内外 面に bei 褐色	底径:5.2	しっかりと削り出しの高 台をもつ。体部外周に細長い 縦弁が取り出している。内面 の見込み部分と外面の高台 内部・亞付は無地。	上田分類B- IV類、15~16 世紀頃
36	第16回	カワラケ	皿	T10トレンチ 旧表土付近	密	良好	内外面明赤褐色	口径:8.0 底径:3.7 器高:1.7	上げ底気味の底部からやや 丸みをもって立ち上がり切端部 は丸くおさめる。底部の切り 離しは回転糸切り。	胎上・焼成な どから新しいものと思われる。
37	第16回	土製品	土人形	T10トレンチ 旧表土付近	密	良好	内外面明赤褐色	-	恵比寿様か大黒様の土人 形。	胎上・焼成な どから新しいものと思われる。
38	第22回	土製品	素焼き	T13トレンチ 表土層	3 mm 大の砂 粒多く含む。	良好	輪部:褐色 底部:暗褐色	長さ:5.9 頭部径:2.8 輪部径:1.5	輪部の両側に沿程度がのこ る。	
41	第20回	土器質 土器	不規	T15トレンチ 耕作土層	1 mm 大の砂 粒含む。密	やや不良	内外面黄褐色	底径:4.8	平坦な底部より逆「ハ」の字 状に立ち上がる。底部の切り 離しは風化のため不明。	底部片
42	第29回	中国青花	風か焼	T17トレンチ 耕作土層	微密な 磁器 土・灰白色	良好	外:口縁部濃緑・ 休部不明文様 内:口縁部濃緑	不明	口縁部が外反する。	口縁部の小片
44	第30回	土器質土 器	小明	T18トレンチ 耕作土層	微砂粒含む。 密	不良	内外面浅黄褐色	底径:5.5	平坦な底部より逆「ハ」の字 状に立ち上がる。底部の切り 離しは風化のため不明。	底部片
45	第30回	陶器	鉢	T18トレンチ 耕作土層	密。灰赤色	良好	口縁部内外面に 暗赤色の施	口径:25.9	体部は斜上方へ向け大きく 開き、口縁部は肥厚され玉縁 状となる。	近代
46	第30回	陶器	擂鉢	T18トレンチ 耕作土層	密。に bei 赤 褐色	良好	外面:に bei 赤 褐色(無輪) 内面:暗赤褐色	口径:31.2	大きさ驚き氣味に立ち上がり、 口縁部が若干外反。内面の 口縁に近い部分に浅い溝。 底部から口縁部に向かって5 条の条溝。	近代、47と同 一個体 口縁部

番号	捕獲	品目	器種	出土地点 土層	胎土	焼成	色調	法量(cm)	調整・手法の特徴他	備考
47	第30回	陶器	縦鉢	T18トレンチ 耕作土層	密。にぶい赤褐色	良好	外:にぶい赤褐色(無釉) 内:暗赤褐色 釉	底径11.8	口沿底気味の底部より斜め上方へ向け大開く。底部より口縁部へ向かって5条1組の条溝が刻まれている。	近代、46と同個体 底部
48	第31回	須恵器	环身	T25トレンチ SK07	0.5 mm 以下の砂粒を含む。密	やや不良	内:外:灰褐色	口径:11.4 受容径:12.2 最大径:13.2 高さ:5.2	口縁部に面をもつ。内外面回転ナデ、底部外側回転凹へラケズリ。	A2型 出雲2期に伴うもの。ほぼ完形
49	第33回	肥前系 器	碗	T25トレンチ II耕作上層	密。灰黄色	良好	オリーブ青色の 釉。外側に文様。	口径:13.0	丸みをおびる底筋から斜め上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	陶胎乗付 口縁部
50	第33回	肥前系 器	鉢	T25トレンチ III耕作土層	密。灰黄色	良好	オリーブ青色の 釉。外側に文様。	口径:15.0	斜め上方に真っ直ぐに立ち上がり、端部を内側に折り返す。内面口縁部以下は無釉。	陶胎乗付 口縁部
54	第36回	土器	壺	T32トレンチ 同色土層	0.5 mm 大の 砂粒を含む。	やや不良	内:外:面明灰褐色	口径24cm 前後	口縁部に平坦な面をもち、端部を若干外側に折り曲げる。	口縁部の破片。 55-56と同一個体か。
55	第36回	土器	壺	T32トレンチ 同色土層	0.5 mm 大の 砂粒を含む。	やや不良	内:外:面明灰褐色	-	細片	複合口縁の後部分の破片。 54-55と同一個体か。
56	第36回	土器	壺	T32トレンチ 同色土層	0.5 mm 大の 砂粒を含む。	やや不良	内:外:面明灰褐色	-	肩部外面に横方向のハケ メ。	頭部の破片。 54-55と同一個体か。
57	第37回	中国縦縫 器	瓶	開発予定地 内採	密。	良好	外:にぶい灰 色 内:灰褐色	底径:11.0	平坦な底部より斜め上方に向かって真っ直ぐに立ち上がる。	底部
58	第37回	陶器	鉢	T18付近 表採	微砂粒含む。 密。にぶい褐色	良好	外:灰褐色、波状 文をもつ。 内:明褐色	口径:33.0	体部は内清気味に立ち上がり端部は外側に折り曲げられ玉縁状を呈する。口縁端部は無釉。	口縁部

第8表 恩部遺跡試掘調査出土石器観察表（五輪塔は除く）

単位(cm)

番号	捕獲	品目	材質	出土地点	残存長	幅	厚さ	重量(g)	備考
51	第33回	石器	黒曜石	T25 旧耕作土層	1.8	1.4	0.35	0.6	基部に抉入りのある凹基無基式
52	第33回	石器	黒曜石	T25 II耕作土層	1.9	1.05	0.3	0.5	基部に抉入りのある凹基無基式

第9表 恩部遺跡試掘調査出土金属製品観察表（錢貨は除く）

単位(cm)

番号	捕獲	品目	材質	出土地点	残存長	幅	厚さ	重量(g)	備考
13	第12回	小刀	鉄	T7-SD01	3.2	袖部:0.37~0.39	-	3.8	鉄打か
26	第14回	不明	鉄	T7-II耕作上層	12.0	4.3	1.6~3.0	120.9	櫛状のもの
40	第25回	小刀	鉄	T15-P48	5.0	袖部:0.37~0.49	9.3	鉄打か	
43	第29回	釘	鉄	T17-II耕作土層	4.3	袖部:0.47~0.55	-	7.9	袖部は方形を呈し、頭部が折り曲げられている。
53	第33回	弾丸	鉛か	T25-旧耕作土層	直径1.4	-	-	12	火薬銃の弾

第10表 恩部遺跡試掘調査出土銭貨観察表

単位 (mm)

番号	博団	銭名	被葬年	時代	出土地點	内径(A)	外径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目(g)	備考
3	第6回	政和通寶	1111年	北宋		-	23.70	-	20.80	0.94~1.19	1.7	
4	第6回	元祐通寶か 1085年	北宋	T3トレンチ地 山頂上から5 枚が回収した 状態で出土	24.41	24.26	20.12	20.27	1.11~1.27	2.1	元祐通寶か	
5	第6回	一貫			24.06	23.72	20.93	20.15	0.84~1.06	1.8		
6	第6回	開元通寶	621年	唐	24.09	23.99	20.08	20.57	-	1.21	2枚で 3.5	
7	第6回	皇宋通寶	1038年	北宋	23.86	23.55	20.57	19.63	1.21			
38	第6回	■■■■		T1トレンチ P33	-	-	-	-	1.38		細片のため詳細不明	

永井久美男「中世の出土銭・出土銭の発見と分類」- 戦場埋蔵鉄調査会 1994年:
「8. 古銭の計測」(9~10頁)を参考に作成。

■…判読不能
■…欠損のため不明

第11表 恩部遺跡試掘調査出土五輪塔(空風輪)観察表

単位(cm)

番号	博団	出土地點	最大長	幅を除く長さ	空輪径(A)	風輪径(B)	括れ部径(C)	坪(D)	括れ度(A:B:C:D)	重量(kg)	内材タイプ	石材	分類
59	第38回	T17トレンチ付近表様	21.3 (22.9)	17.1 (19.4)	11.0 (14.4)	13.9 (14.5)	10.6	5.7	(1.36):(1.37):10.54	2.9	円柱? 砂岩	空輪部に穴あきをもつ宝珠タイプか。	() 内の数字は復元

第12表 恩部遺跡試掘調査出土五輪塔(火輪)観察表

単位(cm)

番号	博団	出土地點	上面幅	下面幅	高さ	納穴平面形	納穴上面径	納穴深さ	幅:高さ	重量(kg)	石材	分類	備考
60	第38回	T17トレンチ付近表様	12.6x (13.0)	23.4x (23.9)	15.0	円形	6.8	5.3	10:6.28	10.6	凝灰岩	相に対する高さの割合が大きい。軒の上端と下端が中央部では平行であるが、端になると上端だけが反り返り、降壇に続く。	底部には水輪の深みにはめ込むための長い円形の溝が形成されている。

第13表 恩部遺跡出土中世陶磁器一覧表

青磁碗										青磁粗環														
蓮B0		蓮B1+蓮B2		蓮B3+蓮B4		苗C1		苗C2		苗C3		蓮D		蓮E		景	不明 その他	蓮B'	楓花A+後花B	景	不明 その他			
1		1		1		1		1		1		1		1		10		1	1	1	1			
白磁碗裏																								
A	B	C	D	E1	E2	不明 その他	B	C	D	E	華南	不明 その他	B1	C	華南C	B2	E	不明 その他						
					1	1				-		3	1											
天日			範輪		その他の中国製品		中国製品合計		朝鮮瓦剣		瓶		小明		東南アジア		国产品・その他		備考					
3	3		青磁香炉1 中国褐釉板1				31						1				天誠天日 2 海口(瓶?) 1 交器系器 21 中世切妻器 5 土師質器 80							

第14表 恩部遺跡試掘調査出土遺物数量表

トレンチ名	遺構名	須恵器	中唐 須恵器	土師器 上器	土師質 カワラケ	貿易 陶磁器	陶磁器	石器 (風摩石)	鉄器	上製品	銅貨	五輪塔	その他	計
T1	覆土	4		4			1							9
T2	覆土				1		1	3	2	1				8
T3	覆土				1		2	5		1		5		14
T4	覆土	1			2		1	2						6
T5	覆土	1					1	2						4
T6	覆土	1		1	2		2	6						12
	覆土	11	4	3	38		11	8		1				76
T7	SD-01			1		1		2	3		1			8
	SD-02	1			1	17		1	3					23
	覆土	73			40	10				1				124
T8	P-14			1										1
	P-15			5										5
	覆土	3		4	2		1	11						21
T9	P-22					1								1
	SD-03	1					1							2
T10	覆土	1		3		1	1	19		3	1		3	32
	覆土													0
T11	P-33									1				1
	P-37				1								1	2
T12	覆土												1	1
T13	覆土												1	1
T14	覆土						2		2	1				5
T15	覆土			2		1	1			1				5
	P-48									1				1
T16	覆土													0
T17	覆土	3				4	11		2	1				21
T18	覆土	3		1	2		11							17
T19	覆土					1								1
T20	覆土	1					1							2
T21	覆土													0
T22	覆土													0
T23	覆土													0
T24	覆土													0
T25	覆土	2		14			7	38				1		62
	SK-07	1		1										2
T26	覆土													0
T27	覆土													0
T28	覆土	1												1
T29	覆土	1												0
	覆土													0
T30	SK-09							1						1
T31	覆土													0
T32	覆土			9					1					10
T33	覆土													0
T34	覆土													0
T35	覆土													0
T36	覆土	1					5	1						7
T37	覆土													0
T38	覆土													0
その他	未採						1	1				2		4
計		108	5	87	79	1	32	162	47	12	2	6	2	490

図 版



調査地遠景（東より）



T6 トレンチ全景（北東より）



T7 トレンチ全景（南より）

図版 2



T8 トレンチ全景（南西より）



T9 トレンチ全景（北より）



T11 トレンチ全景（北東より）



T14トレンチ全景（北東より）



T15トレンチ全景（北東より）



T16トレンチ全景（南より）

図版 4



T17トレンチ全景（南東より）



T25トレンチ全景（南より）



T25トレンチ
SK07遺物出土状況（南西より）



T25 トレンチ
SK07近景



T29 トレンチ全景（北より）



T29 トレンチ
SK08近景

図版 6



T30トレンチ全景（南東より）



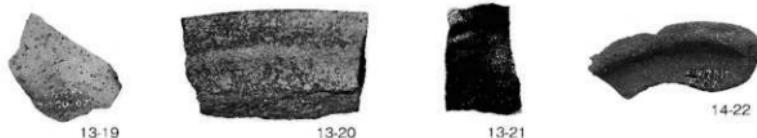
T30トレンチ
SK09全景



発掘作業風景

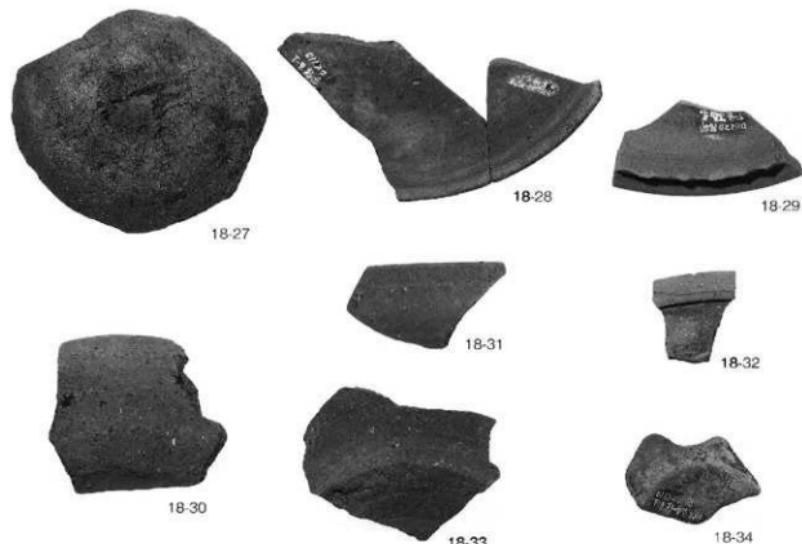


T1・T3・T4・T5・T6 トレンチ出土遺物

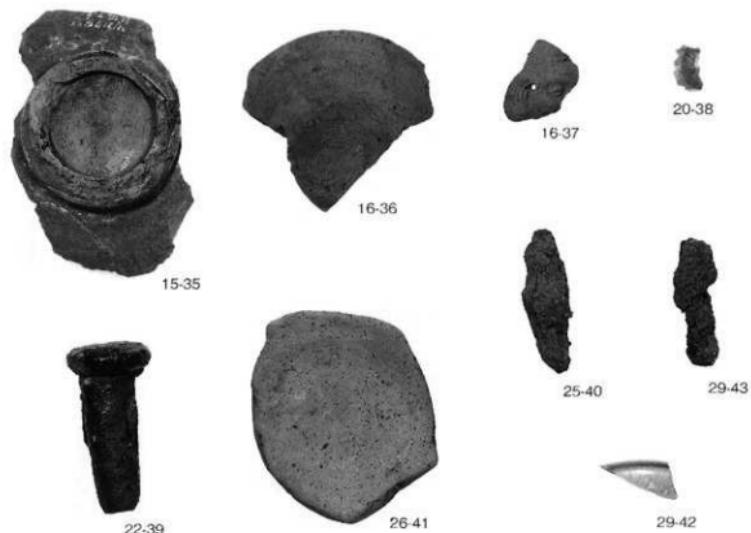


T7 トレンチ出土遺物 (SD01・SD02・遺構外)

図版 8



T8 トレンチ出土遺物



T9・T10・T11・T13・T15 (P48、遺構外)・T17 トレンチ出土遺物



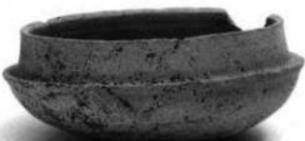
30-44



30-46



30-47



31-48



33-49



33-50



33-51



33-52



33-53



38-59



36-54



36-55



36-56



37-57



37-58



38-60

報告書抄録

ふりがな	おんべいせき					
書名	恩部遺跡					
副書名	八雲村コミュニティー施設建設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次	松江市文化財調査報告第110集					
編集者名	川上 昭一					
編集機関	松江市教育委員会					
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86 TEL (0852) 55-5284					
発行年月日	平成18(2006)年12月					
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)
	市町村	遺跡				
恩部遺跡	島根県				2001.12/7	
	松江市				2001.12/29	
	八雲町	32201	F63	35度23分5秒	2002.9/18	383
	熊野				2002.10/23	
調査原因	八雲村コミュニティー施設建設工事に伴う試掘調査					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
恩部遺跡	散布地	縄文時代、古墳時代、中世	土坑、ピット、溝状遺構	須恵器、土師器、陶磁器、石器	尾根上の平坦部よりピットを多数検出。谷に設定したトレンチ内の土坑より完形の須恵器坏身が出土。	

恩 部 遺 跡

平成18（2006）年12月

発行 松江市教育委員会
島根県松江市末次町86

印刷 (株)高浜印刷
島根県松江市東長江町902-57